

---

# 一年三組ゴークル君

ポンカス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一年三組ゴーグル君

### 【Nコード】

N3149Y

### 【作者名】

ポンカス

### 【あらすじ】

遠い未来の物語。人々はゴーグルに支配されていた。降り止まない雨の街で、錆鉄の匂いと、一部の特権ゴーグルの横暴に蝕まれながら、雌伏の時を過ごしていた。だが人々は決してその牙と炎を失ってしまっていたわけではなかった。鬱積した怒りを刃に変え、それを奴等のゴム紐に突き立ててやる日を待っていた。

ついに時至れり。指導者、ノーラ・ドッグマンの鶴の一声で、一斉に蜂起する人間たち。あまりに有名な「第一次ゴーグル戦争」の幕開けである。

血で血を洗う総力戦は、やがて少年少女、幼いゴーグルたちまでも巻き込み、苛烈を極めていく。そんな戦場の片隅で、運命的な邂逅が果たされる……

これは一人の少年兵と、傷ついたゴーグルの友情物語。「殺せ」矜持に奮い立ち、目一杯の虚勢を張るゴーグルを、しかし少年兵は叩き割ることが出来なかった。

少年とゴーグルは大いなる時代の潮流、運命を乗り越えて、真の絆を手にすることが出来るのか。感動のスペクタクルが今始まる。

## ゴーグル1：ゴーグル君学校生活する

担任教諭の点呼が、止まった。朝のホームルーム、出欠を取っていたが、一つの学生が返事をしないからだ。

「水中？<sup>みずなか</sup> 居るんだろ？」

僕の席のすぐ後ろ、ゴーグル君は先生の呼びかけにくぐもった小声を返すだけだ。とても小さく「はい」とだけ答えるものだから、先生はしようがなさそうに出席簿に丸をつけた。訝しげに顔を見合わせるクラスメイトたちが視界の端でちらついていた。

僕は振り返る。

「ゴーグル君、一体どうしたんだい？ いつもハキハキ答えるのに」「だって」

ゴーグル君はゴム紐を波打たせた。

「<sup>かぶらぎ</sup> 楠木先生、いい人じゃないか」

「そんな…… 彼は悪魔だよ。だって」

ゴーグル君の声音は必死だった。

「昨日、僕を間違つて水泳バッグに放り込んだんだよ？ あんな豚小屋のように狭くて蒸す場所に、この僕を」

言われて昨日の事件を思い出す。水泳の授業が終わり、休み時間なので僕の机の上にゴーグル君を移動させて、お喋りしていた。しばらく話し込んでいたが、僕は急に強烈な尿意に襲われ、ゴーグル君を机に置いたままトイレに駆け込んだ。つまり少しの間ゴーグル君は身動きの取れない状態。そこへ次の授業の担当だった楠木先生が少し早めに教室入りし、ゴーグル君を僕が置きっぱなしにしたゴーグルだと勘違いし、お節介にも僕の水泳バッグにしまってしまったのだった。

楠木先生は謝ったが、ゴーグル君の脳には忘れがたいトラウマを植えつけたらしい。

「仕方がないじゃないか。君はゴーグルなんだから」

勘違いしてしまった先生だけを責めるのも酷というものだろう。

「大体、声を上げればよかつたじゃないか？」

「そんな余裕もないほどに素早くやったんだよ、あの悪魔は」

「ゴーグル君はすっかり先生を天敵扱いしてしまっていた。」

「こら、そこ。私語は駄目だぞ？ 冥府に叩き込まれたいのか？」

僕は首を前に戻して謝った。

「さて。最近、校内が物騒になつてきている」

物騒？

「盗難事件が発生したり、職員室の机に落書きがされていたり、黒板消し落としなんて古典的な悪戯がされていたり、人が殺されたりしている。みんな気をつけるんだぞ？」

「はい」

「とくに水中は、一人であまり行動しないようにな」

名指しされてゴーグル君が身を竦ませた気配があつた。多分気のせいだろうけど。

「先生！。ゴーグル君は土台一人では何も出来ませんよー」

クラスのお調子者、ファルセット伊藤君が茶化す。

「おい、ビブラート。そういうこと言うもんじゃないぞ？ 冥府に叩き込まれたいのか？」

「せんせーい。僕ファルセットですー」

「そうか、すまんすまん」

何となく弛緩した空気になつてしまつて、ホームルームはなあなあであつた。

昼休み。

「ゴーグル君、昼ごはんはどうするんだい？」

「今日は海洋深層水を持ってきているんだ」

「ゴーグル君が自慢げに言う。ゴーグル君は顔や体が、およそ人間のものではないので、声の調子からしか彼の心理バロメータは窺えな

かった。

「へえ。いいね。お姉さんが持たせてくれたのかい？」

「うん」

ゴーグル君のお姉さんは毎朝、ゴーグル君を彼の机まで送り届け、お弁当を置いてから、自分の教室へ向かう。おかしなことにお姉さんは普通の人間だ。

ゴーグル君は歩けないので、いつもお姉さんが世話を焼く。一応、ゴムひもを器用に操って微速前進するくらいは出来るが、その様はあまりに醜悪で気色が悪く、とても見れたものではない。だから移動は専らお姉さんが、僕がさせる。加えて、手がないので、物を持つことが出来ない。だからお弁当を持たされても、頂く段になれば、ここでも補助の役割を要するのだが、お姉さんが毎日一年の教室までやってくるのも可哀想だろうということ僕が担っている。

彼の机の中から、洗面器を取り出し、そこに同じく机の中にお姉さんが入れておいたお弁当、海洋深層水のペットボトルの中身をぶちまける。全部出きった後、ゴーグル君を持ち上げて、そこに浸す。「ああ、イクー。やっぱりこれだよ。僕のような高貴な水中眼鏡は、これくらいの水に浸っているのが一番絵になるんだよね」

「良かったね、ゴーグル君」

彼は実際のところ、食事は必要としない。水に浸すだけで満足する。といつても小生意気にも、彼の認めた水にしか入りたがらないグルメらしい。

「午後からは移動教室があったよね？ またお願いしてもいいかな」

「ああ、うん。お安い御用だよ」

そんな会話をしながら食事を楽しんだ。

午後の授業。

美術のデッサンが行われている。

よくわからないけれど、皆が鉛筆を立てて、それを眇めて見ている

ので真似をして一時間を過ごすことにする。何一つ書きあがっていないかったら先生に怒られるかもしれないけど、創作意欲が湧かなかったとか、神が降りてこなかったとか言えば多分ごまかせるだろう。ゴーグル君はというと、丸椅子の上でじっとしている。彼は多くの科目で実習が免除されている。学期末に行われる考査で、きちんと成績を残せば進級できるといふシステムだ。試験は、口頭で教師から問題が出され、制限時間内に口頭で返すという仕組みになっている。

「御崎君、御崎君」

「なんだい、ゴーグル君、今集中しているから話しかけないで欲しいんだけど」

「暇なんだ」

「だろつよ。」

「乱痴気騒ぎを起こしてよ」

「無茶言わないでよ」

「じゃあ、服を脱いでモデルになってよ」

「いやだよ。短小がばれるじゃないか」

「全く…… ああ言えばじょうゆ」

「やめるよ。そういうこと言っつ」

僕は結局ゴーグル君の相手を適当にこなしながら、白紙の画用紙を提出した。

放課後。

ゴーグル君が自分の席でいつまでもおとなしくしているのが気になった。いや、まあ彼自身の独力ではとても帰宅など出来ないのだから、そうなるのは当たり前なのだけれど。

「ゴーグル君、お姉さんは？」

「あ、ああ。忘れていた。確か生徒会の会議があるとかで来れないって朝言ってたんだっつた」

「そうなのかい？　じゃあ今日は僕が送っていくよ」

「悪いね。いつも」

「気にしなくていいよ」

「ゴーグル君を持ち上げて、何となくポケットの縁にかける。」

「ちよつと！　危ないじゃないか！　落ちて砕け散ったらどうする気なんだよ」

「ああ、ごめんごめん。じゃあ掛けても良いかい？」

「そんな。僕にはそっちの気はないよ」

いつもゴーグル君はこう言って僕が装着するのを嫌がる。それでも一度、強引に嵌めて送って行ったら、警察に通報されてしまったことがあるので、僕としてもそんなにやりたいわけでもなかった。ちなみに警察に電話を入れた近隣の主婦の言い分としては、ゴーグルを掛けた学生が、ぶつぶつと一人で喋りながら歩いていて気味が悪かったとか。傍目には確かにそう映るだろう。

「それじゃあ帰ろうか」

結局僕は彼を手を持ったまま歩き出す。

クラスメイトのゴーグル君と過ごす一日は、大抵こんな感じだった。



## ゴーグル1：ゴーグル君学校生活する（後書き）

何も考えずに書けるようなものを書いてみました。アール指定ですが、結構へビーな下ネタを扱うつもりなので、念のため。直接的な性描写や残酷描写はありません。あらすじと本編は基本的に関係ありません。

## ゴーグル2：ゴーグル君ひび割れる

翌朝、登校途中のゴーグル君と、彼のお姉さんとばったり会った。

「あら。おはよう、健二郎君」

「おはようございます、お姉さん。ゴーグル君もおはよう」

「昨日は眼鏡を家まで送り届けてくれたんですって？」

「ありがとうございます、お姉さんが頭を下げる。少し長めの髪がふわりと揺れた。」

「本当は母さんが迎えに行く手筈になっていたんだけど、すっかり忘れてサスペンスを観てたらしかったから。助かっちゃったわ」  
軽く舌を出す。

「なんだよ、姉ちゃん。気持ち悪いな」

「気持ち悪いとは何よ。アンタのことでしょう？」

「礼はもう言ったよ、僕から」

「何なのよ、変な眼鏡ね」

今更だが、ゴーグル君というのは、愛称だ。本名は水中眼鏡みづなかめがねという。驚くことに戸籍もあるらしい。

それにしても、遠慮なく罵声を浴びせあう姉弟を見ていると、何となく入り辛い雰囲気だ。独特の、気を置けない者同士だけが行える掛け合いというか、他人が踏み込んでいくには少し気構えてしまう。

「健二郎君」

「はい」

「いつもありがとうね。うちの弟の面倒を見てくれて」

「だからよしてよ。そういうの」

ゴーグル君の気持ちもわからないでもない。僕としてもそう改まれると、なんだか背中の辺りがむずむずする。

水泳の時間。

ゴーグル君が唯一参加する実習である。彼はいつも水泳の時間が近づいてくるとそわそわと落ち着かなくなる、ような気がする。実習の度に参加を免除されるゴーグル君。仲間外れ、とは違うのだが、区別がなされている。彼だって生きている？ のだから思うところもあるはずだ。だから、心置きなく参加できる水泳の時間を楽しみにしているのかもしれない。彼が一番輝く時と言っても良いかも知れない。

「がんばれー。ゴーグル！ あと少しだぞー」

「いけー。ゴーグルー。ぶちかませー」

男子たちが一致団結し、四肢をばたつかせて波を起こす。その大きなうねりを、ゴーグル君は一身に受け、弾丸のような勢いをかってプールの反対側の壁へと流れていく。

結局は他力本願なのだが、ゴーグル君は自分で泳いでいるものだと思いついて入っているのだ。だったらそれでいいじゃないかと、クラスの総意で、このような形が取られている。ゴーグル君の内面を一体皆がどこまで慮っているのかわからないが、誰一人真実を告げるような野暮はしていない。ファルセット伊藤も、普段は冗談でゴーグル君を揶揄したりするが、本当に悲しむようなことは言わない。

ゴーグル君は、ひよっとすると幸せなのかもしれない。皆に支えられて、これからも生きていけるんじゃないか。食費はかからないし。

「ああ、まずい！」

突然、背後の男子の一人が、押し殺したような叫びを上げた。

僕も気付く。勢いがつきすぎている。流れは今や、五月雨を集めた最上川より速い。いけない。ほとんど本能的に体を突き動かされる。駆けるようにプールを移動する。地上なら或いは間に合ったかもしれない。だが浮力が邪魔をしようように動かない体では間に合わなかった。

ゴチッ！

ゴーグル君のレンズの部分が向こう側の壁に激突する鈍い音がした。

「ゴーグルくうううううん！」

「水中眼鏡、えーっと、タイムは21秒8か。まずまずじゃないか」  
みすなめがね

休み時間。

ゴーグル君のレンズには縦に大きく、痛々しい傷が走っていた。誰が悪いわけでもない。もし責任の所在がどこかと問われれば、「ゴーグルと人との共存を推し進める委員会」の初代会長である僕だろう。これは入学して間もなく設立されてじゃんけんで負けて任命されただけの経緯だが、なにせよ拜命した以上それなりの責任はつきまとうものである。

それに、そういう事情は抜きにしても、クラスで一番彼と仲が良いのは僕だ。それはつまり彼の色々な特性を知っていることに他ならず、そういった観点から危機管理意識の甘さを指摘されればぐうの音も出ない。

「ゴーグル君、大丈夫かい？」

声をかける。もう何度目か知れない確認。

「大丈夫、大丈夫。これくらい、屁のツツパリにもならないよ」

ゴーグル君の返答も寸分変わらずこれだった。

「だけど、そんなに傷が入っていて、大丈夫なのかい？」

「大丈夫だよ。帰ったら姉ちゃんに言っ取替えてもらうから」

「取り替える!？」

そんなことが出来るのか。それで大丈夫なのか。体の一部ではないのか。いや、そもそも人間の体と同列に語るのは難しいのだ。というか、人間だって臓器移植手術だったり、体の一部を取り替えることだってあるんだ。いやでも…… 思考が混迷する前に、ゴーグル君が笑う。

「だから、御崎君が気にすることはないよ。それに、僕は皆に手伝ってもらって、やっとこさ授業に参加している身なんだ。文句なんて滅相もないよ」

「ゴーグル君」

気付いていたのか。

「なんだい？ まさか僕が気付いていなかったとも思っているのかい？ そんなわけないじゃないか」

またカラカラと笑う。深刻な雰囲気を出さないように努めているのがわかって、逆にこちらが心苦しくなる。

「あんな波が人工のプールで起こるわけがないだろう？ 大体僕の目は節穴じゃないんだ。こんなに立派なレンズが二つも嵌っているんだよ？ 皆が頑張つて波を起こしてくれていることくらい知っていたさ」

「……そっか」

「ああ。ところで御崎君」

「うん？」

「今日のお弁当なんだが、プールの水を汲んできて欲しいんだ」

「お弁当持たせてもらえなかったのかい？」

「いや。あるにはあるけれど、今日はクソまずい水道水なんだよ。家畜の餌でももう少しマシなものだろうに」

母さんの手抜きにも困ったものだ、と不平をもらす。

「でも、プールの水だって、もとは水道水だろう？」

「ああ、でも塩素が入っている。たまにはそういう気分なんだ」

僕はゴーグルになったことはないの、彼の気分というものは察しようがない。でも、何となく思う。彼は僕や他のクラスメイトたちが気を遣わないように、あえてプールの水を所望したのかもしれない。自分は何も気にしていないよ、とでも言うように。

「次の時間は女子が使うだろう？ その後が昼休み。直後ともなればエキスが新鮮だと思うんだ」

「この……」

クサレエ口眼鏡が。

### ゴーグル3：ゴーグル君お留守番する

ここで折角なのでゴーグル君のお姉さんについても、少し触れておきたい。まず名前なのだが、水中美咲みずなかみさきという。この事実を告げれば、誰もが僕と彼女の互いの奇妙な呼称に合点がいくかと思う。お姉さんの方は、僕を苗字で呼ぶと自分の名前を呼んでいるような錯覚が起きておさまりが悪い。逆に僕は彼女の名前を呼ぶと自分の苗字を呼んでいるようでよくわからない気分になる。かといって水中さんと呼ぶのも、なんだかゴーグル君と混同しそうでやはり嫌だ。だからお姉さんは僕を「健二郎君けんじろうくん」、僕はお姉さんを「お姉さん」と呼ぶ。妥当な落とし所かとも思うが、実際はなんだか僕の方だけ一方的に壁を作っているような感じもする。

お姉さんはゴーグル君とはトシゴで、つまり二年生だ。二年生の中では、非常に学業の成績が良いらしく、またその兼ね合いがあるのかは知らないけど、生徒会の役員もしているらしい。書記だとか聞いたような気がする。

このお姉さん、中々良い人で、僕は結構好感を持っている。僕と彼女を結び付けているものがあの非常識な存在なので、甘酸っぱい類のものではないのだけど。面倒見が良く、既述の毎朝の日課についても嫌な顔をしているのを見たことがない。彼女の方から言わせれば、他人でありながらあれこれと面倒を見る僕の方こそ奇特なのかも知れないけど、これまた既述の役割があるので、僕としては義務を忠実にこなしているにすぎなかったりする。

さて。ここまでお姉さんについて、あれこれと考えてみたが、どうしてかという所がまだだった。

僕とお姉さんは、休日を利用して、一緒に街へ出ていた。スポーツ用品店で入用があったのだ。

「ごめんね、付き合わせちゃって」

「いえ、僕にも責任の一端はありますから」

「ああ、でも眼鏡に聞いたら、健二郎君が気に病むようなことではなさそうだったけど？」

「いえ、それでも、僕はまあ彼の友人でもありませんし」  
責任が仮になかったとして、厚意がある。

店の自動ドアを二人並んでくぐる。七月に入って暑さをいや増している外気から断絶されて、冷房の効いた部屋に入った瞬間の爽快感といったらない。これこそが夏の醍醐味だと思っっているくらいだ。

「眼鏡のヤツ、ナウいのを買って来いなんて、色気づいちゃって」  
そうそう、説明が途中になったが、彼女と連れ立ってこんなところまでやって来たのは、ひとえに彼女の弟が駄々をこねたことに端を発する。

例のレンズピキヤ事件から、一日経って、突如彼女から電話があった。ゴーグル君がゴーグルなもので、緊急時に互いに連絡先は教えあっていたが、電話が掛かってきたのは初めてだった。少し驚きながら、ゴーグル君の身に何かあったのかと慌てて出ると、お姉さんのやや緊張したような固い声が返ってきた。

どうも、レンズを新調したいのだが、お姉さんが予備として置いておいたものを彼が御気に召さず、違うものを買ってきて欲しいなどと世迷言をほざいたそうだ。「ナウいやつ」なんて漠然とした希望だけ伝えられて、途方に暮れて僕の方へ連絡を寄越したらしい。男の子の方が感性が近いだろうということ、同行を頼まれた。

律儀というか、弟に甘いというか。そんなの無視して勝手に彼のレンズを付け替えればよいものを。そんな風にも思ったが、全く逆のこととも思った。僕が同じ立場でも、彼の言葉に従ってただろうということだ。ゴーグル君は、自分では自分の破損した部分を付け替えることも出来ない。意向を汲まずにやるのは簡単だけど、それではゴーグル君を物扱いしている気がして、良心の呵責がちょっと半端ない。例えば意志を持った赤子が居たとして、こんなオムツはいやだ、もっとパリッとしたのが良いと主張したとして、それを無視し

てシナシナのをつけるのは可哀想だ。多分そういうことなんだろう。

「ねえ、こんなのかしら?」

お姉さんが一つ僕のもとへ持つてくる。黄色がかったモノだ。ナウいかどうかはわからないが、中々良いデザインに思える。だけど。

「ううん」

「あまり良くない?」

「ゴーグル君、多分口ではナウいのが良いって言うてるけど、本当は機能性の優れたヤツが欲しいんじゃないかと思うんです」

「そうなの? どうしてそんな風に思うの?」

「ゴーグル君、最近まぶしくて仕方ないってばやっていたんです。

失明したとか不謹慎な嘘をついたこともありました」

「まぶしい、って? 周囲の人たちがまぶしく映るとかそういうことじゃなく?」

「太陽らしいです」

「そうなの?」

「ええ。最近夏めいてきて、とてもまぶしいと言っていました」

「そんなこと、あたし初めて聞いたわ」

「きつと、お姉さんに言うのが恥ずかしかったですよ」

「そうなのかしら? 恥ずかしがることじゃないと思うけど」

ひよっとすると、弱音を漏らしたように取られるのが嫌だったんじゃないか、と僕は思う。或いは心配かけたくなかったのか。お姉さんに付いて来なかったのもその所為かもしれない。

「やっぱりあたしには意味がわからないわ。でもそういうことなら健二郎君に付き合ってもらって正解だったということかしら」

「男つてのは、女親とか女兄弟に心配されたり気遣われたりするととても居心地が悪くなったりするものなんですよ」

僕は結局、暗めの色彩のものを選んで進めた。黒は太陽熱を集めて暑そうだが、まぶしさは軽減されるかもしれない。いや、赤の方が良いのかな。まあどうでもいいや。こんなものはプラシーボだ。



「そつだ、折角だからゴムひもも新しいのを買って帰ってあげましようか」

「え？ 言われていたんですか？」

「いや、そうじゃないけど。ゆるゆるになっていたでしょう？ 何だか小汚くなっているし」

「ああ、言われてみれば」

退色して腐ったゴムみたいに汚らしかった筈だ。ゴムの本来の機能としても、伸びきってあまり用を成していない気がした。

「でも、彼は誰かにかけられるのは嫌がるじゃないですか？ あまり替える意味はないような？」

用を成さないとと言っても、人の頭に掛けるわけじゃないのだから、別段まずいことにはならない。

「でもアレ、しょっぱい匂いがするのよ。赤白帽のゴムひもと同じような」

嫌じゃない？ と同意を求められる。僕が何とも言えずに黙っていると、

「折角だから買っていきましよう。そうね、レンズが黒味がかつてるから、同じように黒とか赤系統なんかもいいわね」

楽しそうに笑って勝手に話を進めてしまふ。多分、実際楽しいのだろう。いつまでも手のかかる弟。着せ替え人形のようにされるゴール君の姿が目には浮かぶ。いや、着せ替えゴールか。

## ゴーグル4：ゴーグル君わけを話す

そのままお呼ばれされるような格好で、ゴーグル君とお姉さんの御宅にお邪魔した。にしめ腐ったような色の壁紙をしているのがゴーグル君の部屋で、純白の壁紙をしているのがお姉さんの部屋、らしい。流石にお姉さんの部屋には入ったことがない。必然三人が集まるときはゴーグル君の部屋になるのだが、彼の部屋は少し塩くさいのであまり好かない。ちなみに外観はどこにでもあるような家屋で、築年数は三年、と新築同然だ。いやらしいので聞いたことはないが、二人の家は裕福な様子がある。こちらに越してきたのが三年前だが、越す前も一軒家を持っていたそうだ。

帰ってきて、ゴーグル君の部屋で三人輪になって座った。ゴーグル君は湯浴みをしていたらしく、ノックもなしに入ったお姉さんに随分立腹したが、しばらくしたら落ち着いた。僕には食事と称する水浴びと、風呂に相当するだろう湯浴みの違いがわからなかった。どちらも洗面器を使っていて、せいぜい中の水の温度くらいの違いしかない。

「それで、買ってきてくれたの？」

「ええ。健二郎君にも選んでもらったし、ばつちりよ」

お姉さんがビニール袋に手をつ込み、レンズを取り出した。プラスチックのパッケージを破いて、少し女の子としてどうなのかという程の獰猛さを垣間見た、中身を取り出す。

「うはあ、ナウすぎる。トレンド最先端じゃないか！」

ゴーグル君は座布団の上で、ゴム紐を器用に動かして小さく跳ねる。そんなんでできるんだ。っていうか、死にかけのバツタを連想した。

「もう、そんなにニヤニヤして。だらしないわよ？」

わかるの？

「だって仕方ないじゃないか。これなら僕はゴーグル史に名を残すようなゴーグルになれるかもしれないよ」

「よかつたわね」

お姉さんが菩薩のように優しい顔をしている。やっぱり良い人だな。いや、良いお姉さんというべきか。

雲行きが怪しくなったのは、お姉さんがゴム紐も買ってきたと告げたあたりからだ。袋からまた新しいパツケージを取り出して、意気揚々と見せるお姉さんに、ゴーグル君は何も言わなかった。表情なんてないが、それでも何となくゴーグル君が歓迎していない雰囲気は察せた。

「いらない」

そしてついにそんなことを言った。

「何言ってるの？ こんなにナウいじゃない？」

「そんなのナウくないよ。昭和だよ、昭和。そんなの付けてたら皆に笑われるよ」

笑われないと思うが。

「な！ アンタの今付けてるヤツこそ、皆に笑われるわよ。今に干切れるわよ」

「干切れないよ。笑われていないし」

「干切れるわよ。それに皆も陰で笑っているわよ」

笑ってないってば。

「そんなことないよ」

「あのねえ。アンタがいつまでもそんなの付けてたら、お父さんやお母さんも笑われるのよ？」

「どうしてさ」

「眼鏡の家は、子供にまともなゴム紐も付けてやってないんだって笑われているに決まってるわ」

眼鏡の家って、なんか眼鏡で出来てる家屋みたいだな。

「そんなことないさ。父さんも母さんも何も言わないじゃないか」

「それは……」

ほうら、とゴーグル君は鬼の首を取ったような声をあげる。

「それはアンタにあんまり煩く言うのが可哀想だと思っているだけよ」

「違うね。問題ないと思ってるから、言わないだけでよ」

「全くアンタってゴークルは……」

ちよつと止めた方が良いのだろうか。僕が入っていくのも何だかなとは思うけど、多分止めれるのはこの場では僕だけなんだろう。二人のお母さんは、今は下でトドのようないびきをかいて昼寝している。

「ちよ、ちよつと二人とも落ち着いて」

「……」

二人黙る。お姉さんは今僕が居ることに気付いたというような顔をしている。なにげにかなりヒートアップしていたらしい。

少し落ち着いたら今度は、どこか気恥ずかしげだ。まあ身内の喧嘩を他人に見せてしまえば大抵はこつという反応だろう。

「まずお互いに話し合ってみよう。冷静に」

異存はないようで、お姉さんが頷き、ゴークル君も何も言わなかった。

「どうして、ゴークル君はそんなに紐を付け替えるのが嫌なんだい？」

「それは……」

さっきまでの勢いは何処へやら、口ごもる。

「そうよ。どうして今のくたびれたヤツに拘るのよ？」

「うるさいな。どうでもいいだろう」

「ちよつと。二人とも」

望まぬまま、議事進行および調停役が任ぜられているようだ。

「ゴークル君。お姉さんも、ゴークル君が笑われたりしたら可哀想だから言ってるんだよ？ わかるだろう？」

何も言わない。けれど、首があったならきつと縦に振っていてくれたと思う。

「だから、君の理由をお姉さんに話して納得してもらうのが筋って

ものじゃない？」

厚意を跳ね除ける時には相応の誠意を。わたくしごとだが、死んだ祖父の教えだつたりする。

「……」

「ゴ―グル君は今度は言うのを渋っているわけではないようだ。言葉を選んでいいのかもしいない。」

「父さんに買ってもらったんだ」

「あ」

言葉足らずだが、お姉さんは思い当たることがあつたらしい。

「あれから替えてもらつてなかったの？ お母さんにも？」

「……うん」

お姉さんが中空に視線をさまよわせる。

「つてことは、えーっと。引越してすぐじゃなかったかしら？」

父さんが単身赴任に出かける前でしよう？」

「うん」

そう言えば、彼らの父親が現在単身赴任中だという話は聞いた気がする。

「父さんと約束したんだ」

「約束？」

「姉ちゃんや母さんが気付かなくて、僕が言い出せないとき、父さんがそつと気付いてくれたんだ。事前に何も言わないである日帰ってきたらポンと渡されてさ。紐がまた緩くなつたら遠慮しないで俺に言つんだぞつて。すぐまた買ってやるからな、つて。少し照れくさそうに父さん、そう言つてくれたんだ」

「……そう。そんなことが」

「父さんはあんまり僕の装備について関与しなかつたらう？ 姉ちゃんや母さんに任せきりで」

「うん、そうね」

「父さんはひよつとすると、姉ちゃんや母さんに遠慮してたんじゃないかつて思うんだ」

何となくわかる。女親や女兄弟というのは、可愛がるのが得意で、男衆は大抵出る幕がない。だけどそれは決して、子供や下の兄弟を想っていないわけじゃなくて、ただ単に女より器用じゃないだけなのだ。何かしてやりたいと思っただけでも、それらは既に与えられている。

不覚にも胸が温かくなった。不器用な男親と、不器用な息子の小さな交流。その証だったのか。

「だから僕は今度父さんが帰ってきた時に、父さんに替えてもらおうと思っただけだ」

話しきるとすっきりしたのか、語調は穏やかになっていた。

「ふうん。じゃあ今からお父さんに聞いてみましょう?」

「え?」

「だって、帰ってくるって言っても次は来月だけ? それまでに切れてしまったら困るでしょう?」

僕と جوجل君が事態についていけないまま、置き去りにしてお姉さんが携帯を操作する。耳にあてて繋がるのを待つ。

「あ、もしもし。お父さん? うん。ごめんね。今大丈夫?」

جوجل君に口があったらパクパクと言葉にならない息を吐いている。ただろう。

「うん。えっとね、眼鏡のゴム紐がガツバガバでみすばらしくて仕方ないから、替えたんだけど」

それから数回相槌や質問をして、やがてお姉さんは携帯を切る。

「いいって。はよ替えてやれって」

えー。

## ゴーグル5：ゴーグル君寄り道する

ゴーグル君と繁華街の方まで足を伸ばしていた。あまり堂々と話している、僕の方が変な目で見られるので、彼とサシで出かけるときは注意が必要だ。ちなみに、放課後の寄り道をしようという話なので、お姉さんを誘うわけにもいかなかった。まあなし崩しの形骸化しているのが実情ではあるが、一応校則で寄り道は禁止されていたりする。規範たる彼女に率先して破らせるのも気が引けるといふものだった。

「どこへ行くこうか？」

「ゲーセン行こう」

「ゴーグル君お金持っていたっけ？」

「カバンに財布が入っているよ」

ゴーグル君の持ち物は他の学生とさほど変わらず、弁当用のペットボトルと学生鞆。プールがある時はタオルなんかも持参している。

いや、持参というかお姉さんが持ってくるんだが。そしてこうして帰りを一緒するときは、それらの所持品は僕が持つことになる。

だから、鞆の中に財布が入っているのは知っている。最初はそんなに無用心に教えてしまっただけなのかという余計な気を回したのを覚えていて。何せ誰よりも盗難が容易い相手だろうから。でも、これは完全に取り越し苦労で、彼の財布の中身を見てとても侘しい気持ちになったのを今でも鮮明に思い出せる。

「財布って言っても、ゴーグル君の財布の中にはおはじきばかりが入っているじゃないか？」

そう。開けてみて、色とりどりのおはじきを見つけたとき、僕はどろろ顔をしたのだろうか。一応お金もあるにはあるが、雀の涙ほどの小銭が幾らかあるばかり。お姉さんいわく、必要になったら自分が出すのだから持たせていても危ないだけ、ということらしい。ごもつともである。

「そうは言っけど、百円玉が三枚くらいはあるはずだよ?」

「それは緊急用の電話代だろう? 駄目だよ使っちゃ」

もしかしたら、お姉さんとも、僕ともはぐれてしまつて、途方に暮れる日がやってくるかもしれない。そうなたとき近くの人を捕まえて、というか呼びかけて連絡を取つてもらふ。そういう想定の下に渡されているものだ。

「えー。僕マジヤンしたいよ。UFOキャッチャーもしたい」

「どっちも信じられないくらい思い通りにならないよ? つまらな  
いよ?」

というか三百円じゃ、どっちも満足に出来ない。そもそもどっちをやるにしても僕が操作するのだけど、それで良いのだろうか。

「そんなことを言つて自分だけ面白い思いをする気なんだろう?

何と言つ捻じ曲がつた根性をしているんだろう」

ちよつとムツとしてしまふ。僕は一応彼の身の安全を考えて使うなと言つているのに。

反論の言葉を頭の中で組み立てていると、ゴッグル君が小さく声を出した。何かを見つけたらしい様子に、思考を中断する。

「見てよ、あれ」

ゴッグル君は指がないので、こういつとき何処を指しているつもりなのかわからないのが不便だ。大抵はレンズの向く方向を見れば何とかなるので、今回もそうする。

見覚えのある、しょぼくれた猫背を見つける。

「デクレシエント伊藤君じゃないか?」

「ファルセットだよ。ファルセット伊藤君」

余談だが、ファルセット伊藤君という呼び名は、春先にあつた合唱コンクールで、彼が白目を剥きながら壮絶なファルセットを口から放つたことに起因する。今でも夢に出てくるといふクラスメイトも居るくらい、強烈なインパクトを残した。

「何をやっているんだろう?」

「風俗にでも行くんじゃないだろうか?」



「いや。ひよつとするとカツアゲされた帰りかもしれない」

もつともらしい憶測を交わしながら、彼の方に近づいてみる。あまり接近しすぎてまた白目を剥かれても困るので、少し離れた位置から声をかけてみた。

「ファルセット君、何やってるの？」

「え？ ああ、御崎君か」

「僕も居るぞ、ずっとことごとこい」

「ああ、ゴークル君も一緒か」

ファルセットは、見たところ僕たちと同じように、学校帰りのように、制服姿で学生鞆を持っていた。駅前の噴水広場のベンチに腰掛けていて。一体何をやっているのだろうか。その姿ときたら、まるつきり不審者のそれだ。ちなみに教師に話すときと僕ら同級生に話すのではキャラが結構違う。いやらしい。

「何をやってるんだい？ 帰らないのかい？」

「いや、それがね」

ファルセットは言いづらそうにしていたが、ただ好奇心の虜となつた僕たちから逃れられないと悟つたのか、やがて語りだした。

「俺さあ、今日塾なんだよ」

「ふうん。じゃあ早く行けば良いじゃない？」

「それがあまり行きたくないから、こうしているんじゃないか」

「つまり意気地がなくて、堪え性もなくて、だけど親の期待を無下にするほどの覚悟も持てずに、プラプラとボウフラのように無為に過ごしているってこと？」

「そこまで言わなくても良いだろう？」

ゴークル君はファルセットには時々容赦がない。いつも茶化されている分、仕返しできる時にはきつちりやるのだ。

「でも、こんな所に居て、親御さんに見つかつたりはしないのかい？」

僕の方も疑問を振る。

「俺んちは共働きだからな。少なくとも今は都心さ」

なるほど。

「親が必死に働いている時、息子は塾をスキップか」

「そういうこと言うのやめろよな」

まあ言い方はどうあれ、事実が事実。-google君の方が分があるだろ。

「はあ、まったく。変なのに掴まっちまったぜ。しょうがないから行って来るよ」

ファルセットは立ち上がって、足元に置いていた缶コーヒーを一気に入らあおって、立ち去っていった。

僕たちは、その背を見ながら、何となくゲーセンの気分ではなくなってくる。

「帰ろうか、僕らも」

「そうだね。なんだか僕まで勉強しなくちゃって気になってきた。

そついや、今日の分のノートをコピーさせておくれよ」

-google君はいつも僕が取ったノートをコピーしている。彼は字は読めるが書けない。

「うん。コンビニエンスに寄って帰ろうか」

学校でやればタダなんだけど、事情は先生も知っているので職員室のコピー機を特例で使わせてもらっている、なんだか明日でもいいや、とはならなかった。

まだ僕らは一年生だからそれほどでもないかと呑気に構えていたが、三年間なんてあつという間だろう。合唱だというのに一人奇声を発していたようなクラスメイトでも、ああやって将来と向き合わされているのだ。僕ももう少し危機感を持ったほうが良いのだろうか、と知らず焦燥感を煽られていた。

ふ、と手の中の-google君を見る。彼はこの先、どういう進路を辿るつもりなのだろうか。-googleでも出来る仕事というのはあるのだろうか。彼はひよつとすると、僕以上に将来への不安というものを感しているのかも知れない。

「どうしたんだい？ 早く行こうよ」

「あ、ああ。そうだね」  
少し早足で、駅前を後にした。

## ゴーグル6：ゴーグル君シールを集める

将来の不安はそれはそれで有るのだが、実際には直近に差し迫った厄介事に心を砕くのが人間というものだ。まあ、将来のことにも全く無関係というわけでもないし。

簡単に言ってしまうと、期末試験まで一週間を切った。これが終われば夏休み、という餌をチラつかせて、学生のモチベーションを何とか維持させようという浅ましい知恵を最初に働かせたのは誰だろうか……

「ああ、またダブリだよ」

ゴーグル君が僕の手元を見て、不満げな声を出す。ちなみにダブリと言っても留年の話ではない。

「ねえ、ゴーグル君、僕たちこんなことしてていいのかな」

「え？ なんだい。君が誘ったんじゃないか」

そうなんだけど、と曖昧に返事しながら、次のパッケージも破く。またダブリった。

シールにつられた子供から金銭を搾取するシステムを最初に考えたのはどこの人でなしなんだろう。そしてダブリった時の補償がないのは何故なんだろう。これで僕たちの手元には六枚のガツカリマンシール。そのうちの三枚が、シオフキマンの横顔が描かれたものだ。

完全にアへ顔なんだが、少しも欲情を誘われない。だってマンってことは男だから。

「どうでもいいけど、このファルセット君みたいなのはっかり出るのはどうにかならないのかい？」

言われてみれば例のコンクールで歌っていた彼も、こういう顔をしていた気がする。

「こんなのインチキだよ。詐欺だよ。きっと半分以上コルセット君が入っているんだ」

店の人に言おうと、ゴーグル君が手の中で喚き始めた。

「そのコルセット君ですら、塾に通って成績を上げてやろうと、獯猛なサルのように必死になっているのに、僕たちはこんなところで彼の絶頂シーンばかりを集めてて、本当に良いんだらうか」

「だから、誘ったのは君じゃないか」

「うん、そうなんだけど…… やっぱり帰ろうか」

「えー。せめて違うシールが出るまでは買おうよ。悔しいよ」

僕もまあ心情的には同じである。それから何度か買っては開けるを繰り返した。

結局、シオフキマンのシールを八枚得て、家路を辿る。

今ではもう随分珍しくなった、昔ながらの駄菓子屋を後にすると、既に太陽は天高く昇りきっており、アスファルトの向こうで陽炎も揺らめいていた。

「ファックとしか言いようがないよね。二度と買わない」

「うん。でもこのウエハースどうしようか？」

食べきれず僕のポケットに幾つか入っている。

「今から販売元の本社に行って、外壁に叩きつけよう」

「ゴーグル君は随分とお冠らしい。」

「チヨコレートだからね。きっとウンコを叩きつけたみたいになるよ」

バナラとチヨコの二種類の味があったが、駄菓子屋ではチヨコ味しかなかった。

「まあ、僕としても販売元に対しては穏やかではないけど、でも食べ物で粗末にするのは駄目だよ」

「……それも、そうか」

というか、ゴーグル君が食べられたなら、持って帰る必要もないんだが、まあそれは言っても仕方ない。

「そつだ！ うちの姉ちゃんにやるつ」

「え？ でも迷惑じゃないかい？ 帰る頃にはデロツデロになって

いるよ？」

「大丈夫だよ。甘いものなら何でも食べるよ」

ゴーグル君は安請け合いでするが、大丈夫なんだろうか。こういった類のお菓子は、食玩の方が本体で、お菓子はオマケ。つまり一つ二つ食ったらもういいかなという気持ちになる。まあ有体に言えば不味い。しかもこれから一キロ近く歩き、その間炎天下に晒され続け、中身が溶けきったものになるだろう。はっきり言って人にやるような物ではない。

お姉さんだつてテスト前である。そこへ弟と遊んできたその級友がよくわからないがシールを抜き取ったガツカリマンウエハースをくれる。開けてみると中身が溶けきってアホのように不味い……やっぱり駄目だ。嫌がらせの域だ。

「折角だけど、僕が持つて帰つて処分するよ」

「そうかい？」

頷いてうだる炎天下を進んだ。

ひよっとすると大量のシオフキマンも、ドロドロのウエハースも天罰なのかもしれない。遊んでないで勉強をしるということなんだろう。

ゴーグル君の家に辿り着いた頃には、汗を吸ったシャツが肌に張り付いて気色悪かった。顔とかに汗の塩分が固まってシオフキマンのようになっていないか心配だ。

ゴーグル君の勧めで、厚かましいが彼の家で少し涼ませてもらうことにした。一階にはおばさんが居た。挨拶をすると、後で麦茶を持っていくからと言われて、恐縮した。本当に少し涼を取らせえて貰うだけのつもりだったのだが。

ゴーグル君の部屋で二人、座布団に腰を落ち着かせた。

「そういえば、ゴーグル君はテストの方はどうなんだい？」

「ああ、中間のは見せてなかったっけ？ 概ね大丈夫だよ」

彼の答えは……　と言つても彼が答えた内容を教師が文字にして、それを自分で採点するという何だか虚しい形なのだが、とにかくそれらは教師の配慮で、直接彼の鞆の中にしまわれた。ファルセットが勝手に覗こうとして、危うく冥府に叩き込まれそうになっていたからよく覚えてる。僕も鍋木先生を恐れたわけでもなく、勝手に見るようなことは勿論しなかった。言えば見せてくれたかもしれないが何となく言いそびれて、それっきりになっていた。

「大丈夫って、具体的にはどれくらい？」

「ふふふ。廊下に上位成績者が貼り出される制度があつたなら、僕も載っていたらろっさ」

ほう、それはすごい。しかし意外と言うべきなのか、どうなのか。でもお姉さんが優秀なのだから、弟のゴーグル君も勉強は得意なのかもしれない。お姉さんを比較対象にしているのかは僕にはわからないけど。生物学的な見地から。

「御崎君はどうなんだい？」

「うん。僕はまあボチボチ。平均より少し上くらいかな」

「なんだ、ホラー映画の第一犠牲者のように帰ろう帰ろうと繰り返していたから、どれほど酷いのかと思えば、赤点ストレスとかではないんだね。じゃあ遊んでいても平気じゃないかい？」

それはまあ、そうなのかもしれないけど。少なくとももう少し頑張れることだって出来るのに、という思いもある。もう少し頑張れるのを頑張らないから、僕はこの位置なのかもしれないけど。

「しかし、何かコツとかあるのかい？」

「勉強の？」

「うん。あれば是非ご教授願いたいなと」

ゴーグル君はうんうん唸る。そういうのかどうかは知らないけど、と前置いて。

「僕は姉ちゃんに教えてもらってるんだよね」

「なるほど」

名選手、名監督ということらしい。一人っ子の僕からすれば何とも

羨ましいお姉さんだ。

「良かったら、一緒に勉強してもらえるように頼んでみようか？」

「え、でも迷惑じゃ……」

「大丈夫だよ。姉ちゃんIQ六万くらいあるから」

「ううん。そうかい？」

弟の彼が言うんなら大丈夫なんだろうか。流石に六万は言いすぎだろうけど、教師としての腕も確かなようだし、ありがたいお話だろうか。だけど折角姉と弟が仲良く勉強しているところに凶々しく入っていったいいものか。

結局明言は避けて、考えてみるということにして、お暇することにしました。



## ゴーグル7：ゴーグル君テストを受ける

「どうだった？」

テスト初日が終わった。別室で教官と二人で受けていたゴーグル君が帰ってきたので、第一声聞いてみた。ちなみにその別室と教室の間を往復する間は、担任の錦木先生にお願いしている。

「どうだったもなにも。あの教師は早くクビにならないものかな」「また何かされたのかい？」

「うん。僕のゴム紐の調節部分を指でピンピン弾くんだよ」

そう言えば運ばれているとき、何か喘いでいたような気がする。ゴーグル君はその部分が弱いようだ。性的に。

「君が運ぶように掛け合ってくれないかい？ もう嫌だよ、あいつは」

「ううん。とは言え、僕もテストを受けなきゃいけないし」

「君も別室で受けられるように話してみれば」

「無理だよ。僕は口頭でやる必要なんて無いんだから」

ゴーグル君が言葉に詰まったような雰囲気があった。最初は僕の言葉が理に適っているものだから、反駁できなくなっただらうと思った。だが、少し考えて、ゴーグルである己が身を憂いているのかもしれないと思い当たった。彼だって好きでゴーグルに生まれたわけでもないだろう。彼だって自分の手で筆記具を持って、皆と同じ教室で同じ方式で受けれるものなら、受けたいんじゃないだろうか。

「ごめん」

口をついて謝っていた。

「いや、いいんだよ。わがまま言ったのは僕だ」

「……」

「帰ろう？」

「あ、うん」

ゴークル君を持ち上げる。

別件で少し気になったこと。ヒモの長さを調節する部分。そこを少し撫でてみる。

「あ、ああ、うん、あ」

ゴークル君が甘い声を出した。

下駄箱でお姉さんと合流した。

「こんにちは。テストはどうだった？」

「はい。お姉さんに教えていただいた箇所が、寸分違わず出て逆に気味が悪かったです」

「そう。それは良かったわ」

お姉さんはニコリと笑う。彼女はほんの少し顔がポチャツとしているので、笑うとえくぼが出来る。

「今日も良かったら来る？」

「え、ええ。お邪魔でなければ」

僕は結局ゴークル君とお姉さんの勉強会に同席させてもらうことにした。そうして、テスト勉強に励んだ。ちよつと頑張ってみようと思っただのだ。

遠慮が無いでもなかったが、始めてみると、これが中々はかどるもので、つい毎日のようにお邪魔してしまった。何より、勉強会というのは、少し付加的な高揚があった。大義があつて、いつもならそれぞれ自宅で過ごす時間まで友達と居るといふのは新鮮味があつた。お姉さんとも普段より多く話し、それもまた新鮮だった。

「おいでよ。僕と姉ちゃんだけじゃすぐに見苦しい骨肉の争いが起こるし、君は緩衝材としても役立っているんだよ」

「こら、眼鏡。浅ましいわよ」

緩衝材。まあそういつた役割をこなしている自覚はあつた。彼らは仲の良い姉弟だが、普通のそれらより距離が近い。それはゴークル君のことを考えれば仕方の無いことだろうけども。

まあそんなわけで、喧嘩もよくする。時々本気で心配になるくらいに本音で言い合う。例えば、そんなんだから彼氏の一人も出来ないんだ、とゴーグル君が嘲った時のお姉さんの瞳に宿った烈火を僕は忘れられない。逆に眼鏡はわたしが居ないと何も出来ないクセに、とお姉さんがキレた時は、言いすぎなんじゃないかとはらはらした。だけど、そんな僕の心配もよそに、どんなに激しく言い合っても、しばらくすると勉強を開始して、何気ない会話を交わしながら、徐々に戻って行って、いつもどおりになって…… またしばらくしたら喧嘩する。

そんなことを繰り返しながら、決定的には壊れない。

「御崎君。折角だからガツカリマン買って帰ろうよ」

なんだかんだで、あのシールを一番熱心に集めているのは、ゴーグル君だった。

「またアンタは無駄遣いしようとして。駄目でしょうが。ラーメンのスープに漬けるわよ？」

「横暴だよ。ブース、ブース」

「ブ…… 誰がブスよ！ もう怒った。ドブ川に捨てて帰る」

こんな風に、目を離してなくてもすぐに喧嘩する。

「健二郎君も、変なもの買わないでよ？ 眼鏡の言うことなんて聞かなくていいんだから」

何故か矛先がこっちに向いた。

二人と一ゴーグルで道を歩く。アブラゼミがジイジイとやかましく鳴きあっている街路樹を歩いていると、いやがおうにも汗が噴く。シャツの襟元を持ってパタパタ扇いでいると、お姉さんがこっちを見ているのに気付いた。僕が視線を合わせると、慌てたように前を向きなおす。

「何ですか？」

「あ、いや。男の子は良いわね」

「あー、姉ちゃんが色気づいた。御崎美咲になる気だー」

「そ、そういうんじゃないよ！ 人目を気にしないで、ああいうこと出来るのが良いなって。そういう意味で言ったのよ！」

色気づいたのかは知らないが、確かに女の子は不便だなと思う。っというか、そう言われてみれば、僕とお姉さんが結婚したら彼女の名前は悲惨なことになるのか。まあ、どうせ僕はまだ結婚が出来る歳ではないから。いや、そういうことでもないか。

「おや。ミサキ君じゃないか」

何を話したら良いか思索していたところで、背後から声を掛けられる。少し低いが、女の人の声に聞こえた。

振り返ると、どこかで見たことのある顔があつた。くりくりとした大きな瞳が印象的で、背も低く、幼い印象を受ける。どこで見たんだっただか。だが少なくとも、どこで記憶したにしても、こうして気軽に声を掛けられる程の間柄を彼女と僕は築いていない。つまり知り合いではない。

「ああ、会長じゃない。今帰り？」

すぐ横に顔を向けると、お姉さんも立ち止まって振り返っていた。

ああ、美咲と彼女の下の名を呼んだのか。そしてお姉さんの言葉を聞いて、僕も件の人物と記憶の中の顔と合致させることに成功した。生徒会長だ。

「ああ。テストはどうだった？」

「うん。まあいつも通りよ。優勝するわ」

「はっは。その意気やよし」

優勝の意味はわからないけど、他にも疑問点がある。会長は確か三年だから、お姉さんからしたら、学年的にも立場的にも目上ということになる。仲が良い、ということなのだろうか。

「会長さんは姉ちゃんのソウルメイトだからね」

ゴッグル君が僕の思考を読んだように説明をくれる。

「幼馴染なのよ。幼稚園から一緒よ」

お姉さんも補足。

「ところで？」

その渦中の会長さんが僕に視線を向ける。

「ああ、えっと。一年の御崎健二郎です。ええっと、お姉さん、水中さんとはええっと」

言葉に詰まる。ゴーグル君を通して知り合ったが、僕とお姉さんを友達と称して良いのだろうか。

「ふむ。その腹話術のゴーグル絡みで知り合ったのか？」

会長さんは僕の手の中のゴーグル君にチラリと視線をやって言う。

「腹話術？」

「ああ。美咲君は昔から上手かったからな」

「ええっと？」

お姉さんを見る。首を左右に振った。よく意味がわからない。とりあえず僕は事実を告げてみる。

「ゴーグル君は、その…… 腹話術なんかじゃなくて、自分で喋っているんですよ？」

「はっは。美咲君の影響か？ まあそういう設定だったな設定って。」

「いや、本当に彼は喋っているんですよ？」

「はっは。ゴーグルが喋るわけないだろうに。まあ白けさせないよ  
うに、そういう設定が必要なのはわかるさ」

会長は高笑い。

その後も何度か真実を教えたが、終始こんな調子だった。分かれ道に差し掛かった所で、左に行く僕らに別れを告げて、右に曲がっていった。

## ゴーグル8：ゴーグル君消毒される

詳細を尋ねてみると、会長さんは昔からああなのだという。非科学的なことは信じたがらないようで、幽霊だとか宇宙人だとか、そういった類をまやかしと一蹴する。ゴーグル君はさしずめUMAといったところか。

とにかく、ゴーグル君をお姉さんがやっている腹話術だと信じて疑わない。彼に口や表情筋といったものが無いのが災いしたのかも知れないが、もつと根本的なことだろう。確かに僕も入学するまでゴーグルが喋るものだとは思ってもよらなかった。会長さんは僕よりももっと、常識に囚われやすいタイプなのかもしれない。

「でも、お姉さんの幼馴染ってことは、ゴーグル君とも幼馴染ってことになるんじゃないの？」

「うん。そうなるね。けど、一度も信じてもらえたことはないよ」  
それで良いのだろうか。

「まあそれに、わたしもいつも彼女と眼鏡と一緒に居たわけでもなし、二人が頻繁に会ってたわけではないわ」

お姉さんが少し言いくそくに口を挟む。

ひよつとすると、弟の存在を認めない友達と、彼を意図的にあまり会わせなかったのかもしれない。どちらも嫌いなわけではなく、両者の板ばさみというかジレンマというか、複雑な心情があるのかも  
しれない。

何にせよ、僕が立ち入るべきではないだろうと思う。彼ら姉弟と会長さんの問題だ。話を交える。

「そういえば、会長さんは随分よそよそしい話し方をしていますね」  
幼馴染というのなら、もう少し砕けていても良さそうだ。

「うん。あの子は、幼稚園からあの喋り方よ。わたしのことも最初から君付けだったわ」

「へえ、そうなんですか」

もう一つ。少し気になったこと。多分当たり障りのないこと。

「それにしても、ゴーグル君たちは一度引越したって聞きましたけど?」

「ああ、会長が同じ学校に居るのが不思議ってこと?」

「ええ」

「あの子はわたしを追っかけてこっちに来たからね」

「ストーカーなんだよ。彼女は」

「ふうん。気味が悪いですね。じゃあ、彼女は一人暮らし?」

「そうね。アパートを借りているわ」

よく親が許すものだ。いや、無二のソウルメイトと離れたくないから一人暮らしをさせてくれ、と言えば、親も許す…… のだろうか?

勉強会を終えると、お姉さんとおばさんの勧めを断りきれず、夕食を一緒に運ぶようになった。親に連絡を入ると、好きにすればいいということ、厚意に甘えることにした。

見たこともないご馳走が出るでもなく、普通にカレーだった。福神漬けが少しウチのものより酸味が効いていた。

「ところでゴーグル君は?」

「ゴーグル君?」

「えっと、眼鏡君のあだ名です」

ついつつかりニツクネームを言ってしまったら、おばさんには通じなかった。通じそうなものだが。

「そう、そんな風に呼ばれているのね、あの子は」

「お母さん、そういうえは今日のはあの子、塩水が良いって言ってなかった?」

「あらそうだったかしら。炭酸水を用意してしまったわよ」

「あの子ソーダ嫌がるじゃない」

「あら、駄目よ。眼鏡だってもう子供じゃないんだから、好き嫌いさせちゃ」

母と姉はやはり世話焼きなんだろう。ゴッグル君の話題を持ち出すと、さりげなくも会話が弾む。

「それで、彼は？」

「ああ、今はお風呂じゃない？ お母さん入れた？」

「うん。煮沸したわ」

風呂というのは、熱湯消毒も兼ねていたのだろうか。

二人の話によると、ゴッグル君はいつも消毒を受けて、それから三人で食事という流れのようだ。消毒は念入りに行われるらしい。病気になるったら可哀想だということで、彼女らの愛情の深さを感じる。多分病気とかには罹らないだろうけど、余計なことは言わなかった。それで、今日は僕が居るものだから、普通の家庭のご飯時に三人で先に頂いたということらしい。気を使わせてしまったということらしい。僕が恐縮したのを見て、おばさんが気にしないでねと声を掛けてくれたが、やはり申し訳ない。多分勉強会をご飯時まで続けたせいで、いつもなら消毒が始まる時間まで彼を拘束してしまったことが、今の状況に繋がるのだろう。普段なら帰ってすぐなりに消毒、ご飯、お姉さんと勉強というライフスタイルなんじゃないだろうか。だけどそれに僕を巻き込めば、僕の帰りが遅くなる。だからずらしたのだろう。それでゴッグル君だけご飯が遅くなってしまった。中々難しいものだ。ゴッグルが居る家庭にお邪魔するというのは。いや、ゴッグルも人も関係なく、やっぱり他人の家に上がるってのは、色々気を使い使われということなのかもしれない。

おいとまという段になって、やっとゴッグル君がお風呂からあがった。見送りをするというので、持ち上げて玄関まで行き、靴を履いて、お姉さんに渡す。最初からお姉さんが一人で運べば手間にならないだろうに、見送りなんだから御崎君に持ってもらおうというゴッグル君の要望だった。わかるような気もするがやっぱりよくわからない。



「今日のご馳走様でした」

「君は良いよね。僕はこれからサイダーに漬けられてシユワシユワするらしい」

笑っておく。彼の気持ちを知るために、今度サイダーを箱で買って、家のバスタブに満たして入ってみようか。いや、勿体ないからやめよう。

ご家族に見送られて、何度目か知らない夕食の礼とお邪魔しましたを重ねて、家を出る。

「あ」

近くの電柱の影から覗く顔があった。全校集会なんかで見る童顔。生徒会長ご本人。

「本当にストーキングしている気持ち悪い!!」

見て見ぬフリして去ろうか。逡巡したのが悪かったらしい、目が合ってしまった。

## ゴッグル9：ゴッグル君家をはられている

「また会ったな」

出来たらこんな形で会いたくはなかった、と言ったらどうなるだろうか。

会長さんはゆつくりとした歩みで僕の正面に立つ。近くで見ると本当に小さい。多分百四十センチ台だろう。おまけに顔立ちもあどけない所が目立ち、とても年上には見えなかった。

「それにしても、いきなりご挨拶じゃないか」

「え？」

一瞬僕の考えていたことが顔に出ていたのかと泡食ったが、どうもそつちじゃないらしい。

「わたしは別にストーキングをしていたわけではない」

「そうなんですか？」

どこからどう見てもそうとしか判断できなかったのだが。

「当たり前だ。わたしをストーカーなどと……　こんな侮辱は初めてだ。憤死するかと思っただぞ」

「それはすいませんでした」

俯仰天地に恥じるところなど何もないが、形だけの謝罪というのも時として必要だ。

「わたしはいつも、彼女の家で物乞いをしているのだ」

「物乞い？」

「簡単に言うと、夕食をたかりに来ている」

ああ、やっぱり僕は悪くないんじゃないだろうか。ストーカーと何ちゃって托鉢、どちらが迷惑かというのは僕には判断しかねるところだけだ。

「む？　なんだその目は。わたしの両親からキッチンと彼女の家に食費は入っている。問題は無い」

なるほど。そういうことか。となると会長さんとお姉さんは家族ぐ

るみで仲が良いのだろうか。

「事情はわかりました。じゃあ何でコソコソしていたんですか？」

「わたしはこう見えてもシャイだからな  
ふうん。」

「信じていないようだな。深く傷つく」

「……」

さつきから帰るタイミングを計っているのだが、この会長さん、何気に隙が無い。僕が足を出すと、彼女の方もさりげなく立ち居地を変えて、道を塞いで帰そうとしない。こっちとしては、事情もわかったことだし、もう関係が無いのだから、どいて欲しいのだが。

「賠償を要求する」

「なんですか。謝ったじゃないですか」

「いや。駄目だ。心がこもっていなかった」

そういうところは鋭いらしい。案外と面倒くさい。

「じゃあどうすれば良いんですか？」

「わたしに夕食を馳走したまえ」

「嫌です」

新手のカツアゲに近い。本当に厄介な人間に掴まったらしい、とようやく実感した。

「とは言え、君がわたしの食事を食べたせいで、わたしの夕飯がなくなっただのも事実だ」

ひよっとして僕がゴーグル君のお宅でご馳走になったカレーのことだろうか。だが、どうして僕が食べたと知っているのだろう。疑問に思うとほぼ同時に、彼女がスカートのポケットに手をつまむ。妙にふくらんでいるそこを、嫌な予感がしつつも見ていると、双眼

鏡が出てきた。……普通に犯罪じゃないか。

「肉まんを三十二個おくれ」

「嫌ですよ。僕今二千円しか持っていません」

「わかった、大幅に譲歩して、三つでいい」

ううん。考えてしまう。通販なんかでよくある手法に近い。最初に

少し高い値を言っておいて、値下げと称して妥当な値を言ってくる。今ならこの価格で提供しますという白々しいヤツだ。

それにまんまと乗せられたようになるのも業腹ではあるのだが、無下にするのも忍びなかつたりする。知らなかつたとは言え彼女の食事を僕が平らげたということらしいから。というか、水の中家は彼女の分の食事を考慮していなかったのだろうか。それを僕にあげてしまふというのは、あまりに無体じゃないか。

「どうするのだ？ 嫌だというなら、今から警察に行つて夕食を掠め盗られたと届け出るが？」

「ちよ、ちよつと」

何と恐ろしいことを考えるんだ。

「わかりました。わかりましたよ」

結局よくわからぬまま屈した。異様に悔しい。

「わかれば宜しい。御崎君」

「……よく貴方が生徒会長になれましたね」

せめて嫌味を言うが、会長さんはさして気にした風でもなく、ひらひらと小さな手を振る。

「わたしは別にやりたかつたわけではないのだがな」

予想外の答えに、僕は面食らう。やりたくもないのに生徒会長なんて役職におさまる事態が全く想像つかない。

「美咲君が生徒会をやりたいと言うから、手伝いとして立候補したに過ぎない」

この場合のミサキ君というのはお姉さんのことだろう。

「結果としては彼女を当選させることには成功したのだが…… 書記を希望していたわたしを何故か生徒会長に是非という声が沢山寄せられた」

「へえ。なんでなんですかね」

早く帰りたい。さつさとコンビニに歩き出せば良いのに、会長さんはどうも話に夢中だ。

「いやらしい話、わたしは見ての通り、愛くるしい容姿をしている

「だろう?」

「ほんつとうに、いやらしいですね」

「それで、多分男女問わず、そういう要望が上がったのだろう」  
困ったものだ、と大袈裟に肩をすくめてみせるが、どうも満更でもなさそうだ。

「なるほどなるほど。じゃあ早く行きましょうか。コンビニってここからだと何処が一番近いですかね」

「君は、冷たいヤツだな。もう少しゆっくり話をしても良いだろうに。御崎君?」

さつきからよく喋るが、お喋りが好きなんだろうか。いや。堰を切ったように言葉が口をついているような様子に、一つの推測が成っていた。

この人、多分あんまり友達が居ない。少し話ただけでよくわかったが、こんな外見で、性格はかなりアレだ。多分、友達というよりは観賞用というかマスコットというか、そういう扱いを受けているんじゃないだろうか。猫科の肉食獣と同じで、遠目に見る分には可愛らしいが、あまり進んで近づいていくのは、ちょっと。そんな感じで接する人が多いんじゃないだろうか。何を隠そう、僕も出来たらそうしたい。

とはいえ、邪険にするのも可哀想な気もする。仕方ないから、少し話してみることにするか。

「とりあえずは、僕の呼称だが……」

「その御崎君ってのやめませんか? お姉さんと混同しそうで気になるんです」

「ふむ。丁度わたしも君と同じことを考えていたよ」

小さな腕を組んで、会長さんは唸りだす。しかしすぐに豆電球が浮かんだらしい。

「ミサキックス」

「無理です」

「ミサンガ」

「パスで」

「ミサケン」

「うーん。なしですね」

「ミサエ」

「危ないこと言うのやめてもらえないですか」

「ミサイル」

「話になりません」

「アレも駄目、コレも駄目では、話が進まないじゃないか」

「もっとマシなのにしてくださいよ。というか、あだ名じゃなきゃダメなんですか？」

「とてうと？」

「普通に、御崎って呼び捨てでも良いし」

ちよつとわかりにくいけど、呼び捨てにされるほうが僕で、君付けがお姉さん。それで良いのではないかという気がしてくる。というのももう御崎君でもいい気がしてきた。どうせ、彼女と会うことなどこの先そう何度も無いだろうし。

「いや、君付けをしたい。わたしは誰だってそうしている。そうしないとなたしの中の何かが死ぬ」

大袈裟な人だな。この際そのよくわからないこだわりは死んだらいいじゃない。というか、待てよ。

「じゃあさつきから考えてたニックネームの後に君を付けるつもりだったんですか？」

当然という感じで頷かれる。

「……」

「何だ？」

「普通に下の名前で呼んでもらえないですか？」

「それはわたしと結婚したいということか？」

「全然違います」

「だが、異性を下の名前で呼んでいると、そのうち妊娠すると聞いたことがある」

「……」

「プツと何かが自分の中で切れる音を聞いた気がした。よく頑張ったほうだと思う。」

「じゃあもう何でも良いです。肉まん買いに行きましょう」

「ふむ。わかったよ。ミサキオス君」

「僕らはやっと歩き出した。」

## ゴーグル10：ゴーグル君テストを終える

ようやくというほどでもなく、つつがなく考査が終了した。

僕たちの学校は、ほとんどのテストが二日で終わる。他の人間はどうか知らないけど、僕は一日に多くの教科のテストを受けてさつさと終わらせてくれるこの形式は好きだった。心的外圧は長々受けるものではない。

「はあ、この解放感は何物にも替え難いね」

ゴーグル君が後ろの席からのほほんとした声を掛けてくる。

今は担任の鎚木先生を待っている状態だ。もう今日は後は、彼の帰りのホームルームを残すのみ。それが終われば晴れて解放。テスト休みに入る。さらに先の話を見ると、テスト休み明けに少し通常授業をした後、終業式、夏季休暇となる。うちの父さんなんかは、学生は良いよなど、しょっちゅう愚痴っているが、本当にその通りだと思う。

「テスト休みはどうしようか？」

とりあえず直近に与えられた自由時間。そこに思いを馳せるのは当然のことだろう。振り返ってゴーグル君のレンズを覗き込んだ。

「何時間連続で眠れるか勝負しようよ」

「いいね。僕はこれでも、親に死んでいるかと思ったと言わしめる程に、寝るのが得意だよ？」

ちなみにその時の記録は二十一時間だ。とはいえ、二度寝、三度寝と断続的であったため、彼の言う連続睡眠時間という勝負になればどう転ぶかわからない。そもそもゴーグル君はどれほど寝るのだろうか。根本的な話になると、眠るのだろうか。

愚にもつかない話をしていると、丁度ドアが開く音がして、鎚木先生が入ってきた。

「みんなお疲れ様。明日から少しの間、テスト休みになるが、きちんと風紀を守って過ごすんだぞ」



定型句のように一通りの労いを口にした後、

「それで今日はもう解散なんだが、その前に少しプリントを配る」  
小脇に抱えていたプリントの束を目分量で取って、一番前の席の人に渡しだす。

「先生、それって」

クラスの男子が声をかける。妙に弾んだ調子なのは、テスト後の開放感からだろうか。

「ああ」

先生はにやりと口の端を持ち上げてみせた。

「今から雨乞いダンスパーティーの参加表明を確認する」  
教室中がわっと沸き立った。

ホールルーム後、生徒会室。

「雨乞いダンスパーティーと言うのはね、うちの学校の目玉イベントの一つなの」

さっそくぶつけた質問に、お姉さんは淡々と答えてくれた。妙に事務的な反応で、怪訝に思った。

「確か変態共の饗宴ということだったっけ」

ゴーグル君も少しは予備知識があるらしい。というより、僕のように何も知らずに入学してくる人間の方が少ないという話だった。

「相変わらず冴え渡るな、美咲君の腹話術は」

生徒会室なので当然会長さんもいた。

「それで、ミサキオス君は参加はしないのか？」

「得体の知れないモノには基本的に日和見するタイプなので」  
「賢明ね」

先ほどクラスで取ったアンケートには参加か不参加の二択しかなく、僕は当然不参加に丸をつけた。そして何故かクラス全員の意思を吸い上げた、そのアンケート用紙の束を生徒会室に届ける役目を仰せつかってしまった。何故かというより、多分クラス委員のファルセ

ツトが今日は欠席していたせいだろう。

「そもそも何なんですか、雨乞いダンスパーティーって?」

「ふむ。わたしから説明しよう」

会長さんがしてくれた説明は概略すると、大体こんな感じだ。

まず、僕らの学校には姉妹校があり、それは九州にあるそう。あちらの方が本校に当たるらしく、こっちは暖簾わけということらしい。ここら辺の事情もさっぱり知らなかった。家から近く、成績からいっても妥当だという理由だけでこの学校を選んだので、沿革だとか起源だとかは知らなかった。

さて、とにかくその本校たる九州の母体。それが建っている地域は毎年深刻な水不足に悩まされるそう。聞けば確かにニューズなどで、やれ節水やれ断水と話題になっているので聞き覚えのある地名だった。そんな困った土地柄に、発案された行事が、件の雨乞いダンスパーティーということらしい。そしてそれは、こっちの学校でも執り行われることになっている。

「なるほど。それで具体的にはどうするんですか?」

「雨乞いダンスをする踊り手と、それを盛り上げる観衆とに別れ、皆が皆、夏の空に慈雨を願う。オールフォーレイン。そのスローガンの元に会場が団結して盛り上がる行事だ。まあ実際の様態ということになると、これはもう見たほうが早い。百聞は一見に如かずというヤツさ」

「僕は不参加なんですけど?」

「そうではない。このアンケートは、踊り手としての参加、不参加の意思を問うものであり、踊り手を受けないのであれば、必然観衆側に回る」

何が必然なのかはわからないが、どうやらもともとが強制ということらしい。

「……実際、効果の程はあるんですか?」

「疑う気持ちはわかる。わたしもこんな前時代的なイベント事で、雨が降るとも思えない」

そういえば会長さんはオカルト的なことは好かなかったな。

「ところがどっこい、これが効果があるのだよ」

「そんな馬鹿な」

「一時期、君のようなイベントに懐疑的な者達がボイコットをして、行事が出来なかったことがあった」

「まあ、そう考えるのも無理はないわよね」

お姉さんが軽く口を挟む。

「だが、その年と、今までやってきた年の平均降雨量を比べると、実に十七ミリも減少していたのだ！」

しよっぱくはないですか。っていうか偶然じゃないですか。色々言いたいことがあったが、まだ説明が続くようなので、聞いてみる。

「この結果に、イベント擁護側は水を得た魚、文字通りだな、今うまいこと言ったか？」

「早く続けてください」

「……当時のイベント懐疑派の急先鋒であった校長は解任、私刑に処された」

「なるほど」

「それ以来、数字を味方につけた擁護派の思うさま、連綿と受け継がれてきた伝統行事となったのだよ」

「……」

異を唱えても無駄なのだろう。実際の効果はこの際問題ではなく、学校のお偉方は勿論、先程の教室の様子を見るに生徒側の大多数も意欲的であれば、マイノリティーは僕のような人間の方。まあ元々止めてやるかってほどの気概も義理もないので、僕が不参加と出来れば良かっただけなのだが、それも強制参加である以上難しそう。となれば諦めて流されるのが利口か。

「まあ最初は面食らうかも知れないけど、そのうち慣れるわ」  
お姉さんがそう締めくくった。

## ゴーグル11：ゴーグル君アイスマみれになる

自宅。ゴーグル君を招き、何をするでもなく、僕の部屋でテレビを観ていた。

実況『それにしても、これはビデオで見る限り、アウトに見えますね』

解説『ええ、これはホリケツ監督が怒るのも無理はないでしょう』  
野球だ。デイゲームをやっている。テスト休みだというのに、土日と重なってしまっただけは損した気分になるのは何故だろうか。

「あ、御崎君！ ホリケツがまた」

ぼんやりと観ていた画面、微妙なジャッジに激昂している監督が、審判に詰め寄っていく。また手を出してしまうのか。

実況『あつと、ホリケツ監督、かなり興奮しています。しかしこれはいけません！ 手を出してしまいました』

解説『ええ』

実況『あつと、また股間です。股間をまさぐるようにしています。審判の袋と棒の間、そこに中指と薬指を差し込んだ格好になっています。スプリットフィンガーゴールデンボールですか、これは？』  
解説『ええ。スプリットですね。握りは浅く、しかし相当の切れ味がありますね。軽く捻るだけで、恐らくは昇天するのではないでしょう。それほどの素晴らしいスプリットですね。メジャーでもこれほどの……』

実況『あつと。しかし退場！ 退場です。ホリケツ監督、スプリットで退場』

股間を握られた罍審が、顔を真っ赤にして、右手を振り回す。ゴーグル君がクスクス笑うのが聞こえた。僕も思わず笑ってしまいそうになる光景だ。またか、という感じである。

実況『これで、ホリケツ監督は今年だけで、ええっと…… 十三回目の退場処分ですね。いずれも審判を侮辱したという形ですが』

解説「いつそ清しいですよ。それに退場になるとわかっていてなお、痴漢行為をするのですから、チームにとっても士気に繋がるんじゃないですか？」

解説がわけのわからないフオローに回るのもこれまたお約束で、僕とゴーグル君は更に笑いを誘われる。その生き様自体が一発ギャグのような人種というのは、どこの世界でも輝くのは世の常。まだペナント前半戦も終わっていないのに早くも今期での解任が決まっているという異例のスピード決着を手中に収めながら、未だ攻めの姿勢を忘れず、こうして退場を積み重ねる。このままではシーズン中の解任にも発展しうるだろうに、それでもブレない。きつと触らずには居られないのだろう。それが彼のアイデンティティーなのだろう。

僕はこんな大人にはなりたくない。心からそう思わせてくれる稀代のケツブツと言えよう。

「いやあ、笑った笑った。オチはわかっているのに、あんなに面白いんだから、反則だよ」

ゴーグル君はまだヒイヒイと呼吸が落ち着かないまま、言ってくる。「オチとか言ったら悪いよ。彼だって一生懸命やっているんだからでもまあ…… ブラウン管の向こうの人間に、これだけの笑激を与えられるんだから、やっぱり才能だよな」

「ね。僕はでも股間じゃなくて、あの乳首をまさぐるヤツ、あれが好きだな」

「ああ。フェザータッチのことかい？ あれも気持ち悪かったね、そつういえば」

ゴーグル君とはやはり意見がよくあう。あの監督を正しく評価している。

「それにしても、ホリケツが居なくなったらつまらないね。どこか行こうか？」

「うーん。でも灼熱のアスファルトを歩くのは君だよ？」

「それを言われると、辛いなあ」

興味を失ったので二人ともテレビをBGMにしてしまう。

「だったら、あいすくりんでもねぶろうか？ 冷蔵庫にあったよ」

しまったと思ったときには遅く、僕は最後まで言ってしまった。

「ああ、いいね。頂こうかな。洗面器も一緒にね」

だが、ゴーグル君は何でもなさそうに、そう答える。

「洗面器？」

「いいからいいから。用意してみてくださいよ」

彼があまりに自信に満ちた様子なので、その通りにしてしまった。

夕方になり、そろそろゴーグル君を家までお届けにあがろうかということになった。その道中、アイスクリームについて聞いてみた。

「どうだった？ 濃厚ミルク味のアイスは？」

「べとべとになった」

洗面器に、カップのアイスを丸ごとひっくり返し、溶けるまで待ち、そこに彼をひたした。確かに言葉通り、べとべとになった。でもそういうことじゃなくて……

「味のことだよ」

「わかるわけないじゃない」

「そっか」

「でも甘い感じはしたよ。とても贅沢をさせてもらった気分にもなった」

まあ、一つ二百円もするアイスクリームを、食べるでもなく溶かしたのだから、贅沢と言えばそうなのかもしれない。救いなのは、彼が思いのほか喜んでくれたことだろうか。

「自分の家じゃ、勿体無いからって、人間の食べる物は食べさせてもらえないからね。酷い話だよ」

「ははは」

「また今度、そうだな…… 今度はカレーまみれにしてよ。アレも食べてみたかったんだ」

「機会があればね」

カレーと言え、ふと思い出したことがあった。別件だが聞いてみようか。

「そういえば、会長さんは、君の家に食事を貰いに来るそうだね？」

「え？ ああ、よく知っているね。恥ずかしげもなく毎晩のように来るよ」

「ふうん。でもこないだ、僕がカレーをご馳走になった時があったじゃん？ あの日はどうしたの？」

「え？ 普通に来たよ。ちょっと遅めだったけど。きっちり二人前くらいは食べて帰って行ったんじゃないかな」

「……」

なんとさもしい生徒会長も居たものだ、と一周して感心してしまう。つまり彼女は、あの日、水中家のカレー鍋には十分な量のルーがあることを知っていたいながら、僕に肉まんをたかり、しかも後々ちゃっかり水中家にもお邪魔していたことになる。

「何か気になることでもあるのかい？」

黙ってしまった僕に、ゴッグル君が不思議そうな声をかけてくる。

少し迷ったが、彼女のあの日の行動を説明してしまった。

「ああ、御崎君は気に入られたんだね」

「何だい、それ」

どこをどうしたら、そういう結論に至るのか。どちらかというところ、最初にストーリーカー扱いをしまして、それを根にもたれて嫌がらせされた気分なのだけど。

「彼女は結構な人見知りだからね。普通ならご飯をたかるなんて、よく知らない人間相手には絶対にやらないよ」

「たかられたんだけど？」

肉まんを四つも買い与えた。土壇場で予定より一つ多く頼んでいた。だから普通は、だって。君は気に入られたから、わがままを言っ

「たんだよ」

わがままとかそういう話なんだろうか。色々腑に落ちないけど、これ以上は悪口になってしまいそうなので控えることにする。

「……結構、彼女について詳しいんだね？」

「まあ付き合いは長いからね。主に姉ちゃんと、だけど」

「そっぴい、腹話ゴ―グルとしか認識されていなかったっけ。」

「あまり嫌わないでやってくれないかな？」

「え？」

「アレで姉ちゃんには良くしてもらってるし、僕も嫌いじゃない。ちよつと変わっているけど」

「……ちよつと？」

「だいぶ変わってるけど、悪い人じゃないんだ。多分」

意外な気持ちになった。認識すらされていない相手だというのに、擁護に回るとは。

大人なんだね、と率直に思った。彼は時々、こっぴう面を見せる。



## ゴーグル12：ゴーグル君パーティーに出席する

体育館に生徒が全て集められている。黒い頭と、紺のブレザーとセーラー服が、波のように連なっている様は、壮観と言えそうなのだろうけど、それ以上に暑さで参ってしまう。蒸し風呂だ。

司会を務めるのは、どこか外部から来た人間のようで、生徒主導で行われるものではないのがわかる。恰幅の良い四十がらみのおっさんが、スーツに身を包み、しきりにハンカチで顔の汗を拭いながら、踊り手の紹介をしていく。

「では続いて、三年D組の、園田慶介君です。では、一言コメントを頂いていますので僭越ながら代読させていただきます。天にまします神に捧げる情熱を前面に押し出し、篤く雨乞い申し上げます……」とのことです。それでは早速どうぞ」

司会の紹介が終わると、体育館の袖から、一人男子生徒が現れる。下半身に辛うじて短いパンツを履いているが、トランクスにも短パンにも見える。上半身は当然のように裸身である。これは今までの参加者も彼とほとんど変わらぬ格好をしていたので、嫌なことに目に馴染んでしまった。

体育館のステージは、雨空を描いた美術部の壁紙に包まれており、ステージ上にはスタンドマイクが一本立っているだけという様相だが、皆一様に、マイクがあればそれでいいというスタンスだ。

踊りを奉る。最初は流麗に、厳かささえ感じられる、しずしずとした所作だ。神楽舞というのは僕はキチンと見たことはないが、大きくも優雅で、何故かシンとした気持ちにさせられるのだから、非常に腹が立つ。

「多分そろそろ変調するよ」

手に握ったゴーグル君が合図を送ったかのように、突如ステージ上の彼の動きが止まる。

次の瞬間、持っていた扇子を放り投げ、手を鞭のように背中とも腹

とも言わず、体中に出鱈目に打ちつけ始める。

「きええええ、ほ、ほあ、ふあ、ちゃ、あ、あ、あああああああああああ」

それが一通り終わると、奇声を上げながらステージ上を開脚前転する。回り終わると、支点にしていた両拳を上に向かって突き上げる。当然前転後なので足を開いたまま。支えを失って、簡単に彼の体は背中から落ちた。ゴツと鈍い音をマイクが拾い、頭を打ったことが窺えるが、わけのわからないトランス状態の園田君は、そのまま背中を支点にして、今度はその場で体をくるくると回し始めた。キユキユと床が擦れる音がする。

「あああああ、ほへにはー、らっらっらら、ぷぎしゃー!!」

起き上がると今度は摩擦でも起こしそうな速さで、股間の上を、両手で擦り始める。

皆見入っているようだ。ほとんどの人間が身じろぎ一つせず、ステージ上に視線を釘付けにされていた。

「あ、あ、あ、あ、アマテラス、ケチケチセスニ、アメフラス……」  
突然股間を触る手を止め、くるりとこっちに背中を向け、雨空を描いたステージ奥の壁紙に向かって低頭する。そのまま膝から落ち、歌を歌い始める。三流のラップ調のようだ。先程の踊り手が演歌調の歌い方だったので、対比となっている。

歌い終わると、もう一度背中から崩れ落ちる。いつの間にかスタンドからマイクを引き抜いていたようで、最後に吐息たっぷりにこう言った。

「オールフォーレイン」

その瞬間、爆発したような拍手の嵐が起き、地鳴りのような歓声が体育館を包んだ。

園田君は、憑き物が落ちたような晴れやかな顔で拍手に一通り応えると、すぐに袖の方へ消えていった。

遠目にもわかるほどにトランクスを押し上げた勃起と、赤く皮が捲れた背中が、ダンスの激しさを如実に物語っていた。

「オールフォーレイン！ オールフォーレイン！ オールフォーレイン！」

いつの間にか、会場中が一体となって、スローガンを連呼していた。事前に打ち合わせでもしたかのように、一糸乱れぬ調子で、全体が完璧にはもっているようだ。

うちの学校は大丈夫なんだろうか。

「彼が優勝候補らしいね」

轟音の隙間を掻い潜るように、ゴッグル君が声をかけてくる。

「へえ、すごいね」

今晚は確か、チャーハンだったかな。鮭の身を解し、野沢菜を刻んで、ゴマを振らした一品。母さんの料理の中でも僕はかなり好きな部類だ。

「園田さんは、雨乞いダンス推薦だったし、一年の頃からすごかったらしいよ？」

「へえ、すごいね」

おかずの方は何だろうか。肉料理だと思う。あ、そういえば、帰りに卵を買ってきてくれと言われていた。卵料理なんだろうか。

「今年は集大成だとかほざいて、ダンスの日にあわせて、六キロも減量したらしい」

「へえ、それはすごい」

「その通り。彼の実力は、もう既に超高校級と言えよう。それだけの実力を有しながら、驕らない意識の高さも素直に評価出来るな」

「え？」

誰かが僕たちの会話に入ってきた。誰だろうと振り返ると、小柄な老人が立っていた。落ち窪んだ眼窩とは対照的に、瞳には活力が漲っていて、背筋が曲がることもなく、凜としていた。

「あの？」

「私は全日本雨乞いダンス協会で、一応顧問のようなことをやっている、あまみやれんぞう雨宮恋蔵こいざうと言う者だ。以後よしなに、な」

そんな組織があるのか。しかも顧問ということは、その道にあって、

ひとかどの人物ということになるのだろうか。こっちに来ないで欲しい。

「ああ、確か、審査員をやっている御仁だよ。現役時代は、博多のアメフラシとまで呼ばれた不世出のダンサーだよ。確かタイトルを総なめにした程の実力者だよ」

「ゴーグル君、さつきから僕がひくほど詳しいのは何故なんだい？」  
「ほう、そっちのゴーグルは雨乞いダンスについて少しは知識があるようだな」

僕の質問は立ち消え、突然割って入ってきた雨宮顧問に会話の主導権を握られる。

「僕もそんなに詳しいわけじゃないけど、流石に有名人ですから」

「はっは、もう昔のことだよ」  
もう何でもいいか。

「それで、雨宮さんはどうして、僕と御崎君のところへ？ 審査員席は用意されているでしょう？」

「なに。ここがマイチ盛り上がっていないようなのでな。ここは一つ私が自らダンスの見所を解説してやろうかとな。何、年寄りのお節介とでも思ってくればよい」  
余計なことを。

「それは光栄ですね。御崎君、思ったことを聞いてみたら？」

ゴーグル君がこっちにふつてくる。ていよく厄介ごとを押し付けられた気もするが、どうなのか。ゴーグル君自身、この顧問にある程度の敬意を持っているようだ。

「ええつと。それじゃあ……」

ボケてないですよ、と聞きかけた時、

「むう、いかん！ 見ろ！」

突然、雨宮顧問が大きな声を出す。僕の懸念した通りやはり、これは心神を喪失しているんじゃないだろうか。情緒不安定な状態なんじゃないか。

だが、言われてステージに目を戻すと、司会の男性が何か慌ててい

る。本当に非常事態らしい。

「君！ ダメだよ。君はエントリーしていないだろう？」

司会が巨体を揺らしながら、袖から出てこようとする一人の男子生徒を必死に押さえつけている様子だ。

あれは……

「ファルセット君だ！ ファルセット伊藤君だ！」

ゴーグル君が緊迫した調子で叫ぶ。見ると確かに、見知ったクラス委員の顔だった。

### -google 13: google 君 た き つ ける

会場が騒然となる。渦中の人、ファルセット伊藤は、司会の人と押しから饅頭しながら、このような主張を繰り返しているようだ。

自分が休んでいる間に、勝手に不参加の表明がなされたのは不当である。ただちに自分も踊り手としての参加を求めろ。

「まずいよ、御崎君」

「うん？」

「まずいって。雨乞いダンスにあんな不屈きな粗相をやらかしたら、ファルセット君はこれから先、学校中の敵だよ！」

「ふうん」

「御崎君！ とめてあげようよ！」

正直意外だった。google 君がファルセットに対してそんな真心を見せるとは。

「むう。それだけではない！ あやつ、粗チンを出すつもりだ！」

顧問が叫ぶ。

「そんな……」

「粗チンかどうかなんて、出してみるまでわからないじゃないですか」

「何を言っている！ あんな粗チン顔をした男が居るか！ まずいな。テノールバス後藤と言ったか、粗チンを出したら最後。最悪の場合、退学になるぞ！」

「うん。雨乞いダンスには不文律があるんだ。如何に昂揚しようとして下半身を露出してはいけない。それを破るということは、もうダンサーではないんだ」

それで退学という重い処分が下るのか。その以前に警察に捕まるけどな。

顧問が何事か叫んで、部下であろう、多分協会の人間たちに指示を

飛ばす。早く壇上に登ってあの不屈き者を捕まえるという内容だった。不測の事態に浮き足立っていた人間たちが弾かれたように、駆けて行く。

顧問は額にびっしりと玉の汗をかいていた。呪詛のように唇をわななかせながら、呟く内容は、正直理解に苦しんだ。

「雨乞いに真摯であればあるほど、つまり初心者であればあるほど、もう脱ぐしかないという間違った思考に囚われやすい。だがそれはダメなのだよ。男神たちの不興を買うばかりで、慈雨など望むべくも無い。それが見えていないのだ。こんなにも簡単なことなのに……いや、私たち皆が忘れているのだ。日々研鑽し、深く求道する我らダンサーは、皆通る道なのに。ひたむきに情熱を胸にすればするほど、かつて自分が犯そうとした過ちに」

要約すると、初心者だった頃の気持ちを忘れてしまった、自分たちにも非があるということらしい。

「御崎君、と言ったね。君は正直、雨乞いダンスを快く思っていないだろう？ 茶番以下だと？」

「はい」

「そんな君だから出来ることがある。いや、君にしか出来ないことがある。ここで、テノールバス後藤を力で押さえつけるのは簡単だが、それでは彼は屈折してしまうだろう。今はまっすぐな粗チンも、右や左に曲がってしまうだろう。だから、諭してやってくれぬか？ 君にしか頼めないことなんだ。後生だ」

僕にしか出来ない…… 本当だろうか。

「御崎君！ やろうよ！ 彼を救ってあげるんだ。こすく、浅まし、時折カMEMシのような匂いがする彼だけど、大切なクラスの仲間じゃないか！」

少し情にほだされた。彼らの言う理屈は、それこそ欠片も理解できないけど、ゴッグル君が願う内容は、とてもシンプルだ。友達を救ってやるう。間違った道に進むのなら、いくらでも現実を突きつけて、それをとめてやるう。

「御崎君！」  
走り出した。僕に何が出来るのかは知らないけど、理を説こう。それくらいしか出来ないけど、顧問やゴークル君の言うことを信じるなら、僕にしか出来ないことがある。

体育館のステージ、すぐ下にやってきた。三人がかりで両手を押さえつけられたフルセットの姿が見えた。それでも全身を器用に這わせ、腰の力だけでトランクスを脱ごうとしているようだ。もう半ケツ状態で、今にも粗チンがまるび出ようとしていた。

「ピアニツシモ君！」

「御崎君か！ こいつらをどうにかしてくれ！」

「何を言っているんだ！ 君は如意棒を取り出そうと言っただろう？ バカな真似はよすんだ！」

「バカはこいつらだ！ もう出すしかないじゃないか！ 僕はまだ技量も伴わない。だったら、情熱を。たぎる情熱を解き放つしかないじゃないか！」

「ダメだよ！ 犯罪だよ！」

「知ったことか！ 捕まるのなら捕まればいい。だけど、それでも雨を降らしたいんだ」

何がそこまで彼を駆り立てるのだろう。もしかすると、僕は勘違いしていたのかもしれない。雨乞いダンスを気が触れたイベントだと考えていた節がある。だけど、やっている本人たちは、ここに全ての照準を合わせて、研鑽し、何もかもを投げうってでも参加したいのだ。わからない。意味がわからない。だけど……

「そんな粗チンを出してどうなるはずもないだろう！」

「やってみなくちゃわからないだろうが」

「誰も幸せにはならない。勿論雨も降らない」

「僕は幸せになる！ たとえ降らなくても、やりきったことだけは間違いないんだ。その達成感だけで、これからも誇りを持って生きていける筈だ」



「何を言っているんだ。今の君は、棒を出すことだけに執心して、人生を棒に振ることを美化しようとしているだけに見える」

「な、何を」

「棒を出すことが手段じゃなく、目的へとすり替わっているんだ！はつきり言つて、性的興奮を得ているとしか言い様がない！」

「な！ 御崎君、いくらなんでも言つていいことと悪いことがあるぞ！」

「傷つくのは君なんだぞ！」

自分の声とは思えないほど、大きな声が体育館に響き渡った。

いつの間にか、場内には僕と彼の言葉だけが木霊しており、他の物音は何一つしていなかった。皆固唾を飲んで見守っているだけのようだ。クラスの間人も、他の学年の生徒も、教員も、彼を止めに入っていた警備の人たちですら。

皆が、僕の次の言葉を待っている。それがわかった。足が竦むような感覚と、それ以上に熱く燃える気炎が胸のうちにあった。

「誰も、見たくないんだ。君の粗チンなんて…… 天に居る神様だつてそうだ」

言いたくはなかった。だけど、それでも口にしなければならぬ。ここに来てようやくわかった。顧問が僕にしか出来ないこと、と言ったのは、正しく僕のモノも粗末であることを見抜いていたのだ。同じく質素である者同士にしか、彼を止める言葉は出ない、ということなのだ。

「女子は皆、笑うだろう。男子は皆、安堵の溜息を漏らすだろう。勿論雨だって降るわけがない。君が欲しい充足というのは、笑い種になつて、警察に捕まることと引き換えにしても、手にしたいものなのか？ それでも気概を貫こうというのか？ それで絶対に後悔しないのか？」

「……」

「やめよう。大きくはないのだから」

「だけど、だけど、アマゾンの人たちだって、全裸じゃないか。だ

から熱帯雨林が広がるんじゃないのか」

「関係あるわけないだろう！！ いい加減にしる！ 科学的根拠のない妄執に囚われて、みすばらしいものを出そう、出そうとして！身の程を知れ！」

「そうか。やっぱり関係がないのか」

ファルセットはゆっくりと瞼を閉じた。たっぷり数秒はそうしていただろうか。

やがて開かれた瞳には、悲しみと後悔が見て取れた。押さえつけている警備の人間たちに、小さく謝って、その手をそつとどける。もう彼らにも、ファルセットが早まったことをするようには見えなかったのだろう。いと簡単に拘束がなくなり、立ち上がる。既にズボンは半ばまで脱げていて、茂みの突端が見えていた。本当にギリギリだったということになる。

やおらずズボンを引き上げた。そして、そのまま深々と頭を下げた。僕にかもしれない。或いはここに集まった人間全てにかもしれないでも、ひよつとすると、雨乞いをしようとした神々にも謝っていたのかもしれない。

やがて水を打ったように静かだった聴衆の中から、まばらな拍手が起きる。やがてそれらは雨がアスファルトに広がるように、ポツポツと広がり、やがて豪雨のように会場中を満たした。

こうして、今年の雨乞いダンスパーティーは、一人の少年の過ちと改心を許す、そんなフィナーレを迎えた。

## ゴーグル14：ゴーグル君課題に取り組む

今回の顛末だが、ファルセットには停学の沙汰が言い渡された。僕も成り行き上、会の進行を滞らせたと言えなくもないが、特にお咎めはなかった。どうやら雨宮顧問が少し口を利いてくれたそうだ。ボケているなどと勘繰って悪いことをしたかもしれない。ただ恐らく、彼を含めた雨乞い道を往く人たちと僕とでは絶望的に価値観が違っただけのことだろう。

通学路。

「それにしても、御崎君にあれほどの勇気があつたなんて知らなかったな」

「たきつけたのは君じゃないか」  
今になって思うと、はめられたという気がしている。いざ飛び出してみると引っ込みがつかなくなってしまったというのが正直な所で、勇気というのは少し違う。それにもし彼の言うとおり僕が勇気ある人間だったとして、それはもつと有意義な場面で発揮したいものだ。  
「まあなんだかんだで、皆拍手してたし、大団円ということなんじゃないかしら」

お姉さんが乗っかってくる。久しぶりに三人で帰るというのに、僕にとつて望まぬ話題で持ちきりだった。

「あのままじゃ、彼……カブトムシ飼育セット遠藤だっけ？ 大変なことになっていただろうし」

「姉ちゃん、セットしか合っていないよ。ファルセットだよ、ファルセット伊藤。たしか」

「まあその伊藤君を救ってあげたんだから、もうちょっと堂々としていたら？」

二人とも他人事だと思っただけで言いたい放題だなあ。まあ、まんまと乗

せられた僕が悪いんだけどさ。

「会長も大層喜んでいたわよ？　しょうもないイベントに喝を入れてくれてスカツとしたって」

「はあ」

「生徒会に誘ってくれって頼まれちゃった」

「え？」

「ほら、ウチの副会長、春くらいに中型免許とって、それで峠を攻めるとか言ってそのまま行方不明じゃない？」

「いや、知らないですけど。大丈夫なんですか、その人」

「姉ちゃんや会長さんの胸の中で今も生きてるよ」

「ふうん」

「それで今は私が庶務兼会計兼副会長兼書記を務めているんだけど、ぶっちゃけ人手が足りてないのよ」

会長さんは何をしているんだろうか。勝手なイメージで悪いんだけど、何もせずにふんぞり返っている様が想像できた。

「だから、私も健二郎君が手伝ってくれたら助かるんだけど」

「えっと、面倒くさいです」

「そっかあ。そう言うと思ってたわ」

それからの日々は淡々と過ぎていった。気色悪いので捨てたけど、ファルセットから感謝状のような手紙が届いたくらいだ。ちなみにテストが帰ってきたが、勉強会の成果が、多少向上していた。しばらく登校して、終業式を経て、夏休みに入った。

夏休みも前半は特に何をするでもなく過ぎていった。父さんが酔っ払って玄関先の猫避けペットボトルの中身を飲んで胃を洗浄する羽目になったり、母さんが新興宗教の勧誘に熱心に耳を傾けていたり、ホリケツ監督がシーズン中の解任に追い込まれたり、多少辛いこともあったけど、やはり平和と言って差し支えない感じだった。

暑い日々が続くけれど、ゴッグル君とは不定期的に会っていた。思

えば高校に上がって一番仲が良いのが彼だ。まさかgoogleの友達  
が出来るなんて夢にも思わなかったが、今では違和感無く一緒に遊  
んでいるんだから、人間の適応能力というのは中々どうして侮れな  
い。

そんなある日、彼の部屋で彼に一つ、提案をした。

「自由研究一緒にやらないかい？」

「え？」

「いや。だって一人でやっても何人でやっても問題ないんだから、  
楽をした方がいいじゃないか」

何をするにしても、分担作業になれば、ひとりでやるよりは楽にな  
るはずだ。

「なるほどね。御崎君らしいや。それで？」

何をするの？ と。

「うん。ベタなところでは、天体観測とかなあ」

もっとベタなのに、朝顔の観察日記とかあるけれど、流石に小学生  
じゃあるまいし、ダメだと言われそうだ。いや、それを言い出した  
ら高校にもなつて自由研究なんて曖昧な課題があるのも可笑しいか  
も。他の学校はないのだろうか、どうなんだろう。

「天体観測？ 楽なのかい？」

「うん。先に星座を調べて、それをあたかも観測したかのように書  
けば大丈夫だよ」

「そうなのかい？ そいつは楽チンポコだね」

そう満足そうに言ってから、google君は、あつと何かに気付いた  
ような声を出した。

「でもウチは姉ちゃんが居るから、大々的に不正は出来ないんだっ  
た」

ああ、なるほど。彼女は案外と真面目だから。

「だったらせめてポーズだけでもやらなくちゃ、か」

「うん。星を見に行くって、野山に出かけないと」

「そうなるか…… こちら辺で星がよく見える場所、か。どっか知

らない？」

「携帯小説を読むといいよ。とか沢山使っているよ！」

「ちゃんとまたたくヤツじゃないと駄目だよ。真面目に考えてよ」  
僕はうんうん唸りながら、周辺地理を頭の中で思い浮かべる。

「もう何でも良いんじゃないかな。どうせ本当に観たいわけじゃないんだから、ちょっと郊外の山に適当に出かければ」

諦めるの早いなあ。まあ僕も考えるのが面倒になってきたところだから、人のことは言えないけど。

「じゃあ、おつか山でいいか。近いし」

「うん、双子山のおつと山よりは獣も居ないだろうしね」

おつか山の方が街寄りなのだ。それでも未開の土地には違いないから、念入りに準備した方が良さそうだ。野人に出くわすかも知れない、見たこともない蛇に噛まれるかもしれない。

こうして、自由研究の課題、決行場所、日時を決めた。それから、夏の星座について書かれた本を図書館で借りてくることにした。彼が勉強をして、言われた通りに僕が文字に起こしていくという作業を終えて、あとはポーズのお出かけを残すのみとなった。

## ゴークル15：ゴークル君星を見る

僕たちの誤算は、彼女が弟想いの世話焼きお姉さんであるということとを失念していたことによる。

「天体観測なんていつ以来かしら。ロマンティックが止まらないわ」  
しかも、一番ノリノリだったりして、始末におえない。

(どうするんだよ、ゴークル君)

(仕方ないじゃないか。ついてくるって聞かないんだから)

僕たちは小声で事後策を話し合う。えらいことになってきた。

(ここ、本当に星空が見えるのかな)

(知らないよ。本当に観測する気なんて更々なかったんだし)

「何をブツブツ話している。性病か？」

「いえ。なんでもないですよ」

おまけに何故か会長さんまで居る始末。本当に大変なことになってしまった。

まあ、どうしてこうなったかというところ、説明するほどのことでもないのだが、僕が約束の時間にゴークル君のお宅を訪問したときにはお姉さんと、何故か会長さんまで玄関先で待ち受けていた。お姉さんはまだ蒸し暑い夏の夜だというのに、長袖の上下に身を包み、会長さんなど迷彩服を着ており、双眼鏡と虫取り網とガスマスクを持っていた。多分ついてくる気なのだろう、と思ったらやっぱりついてきた。

そしてどういったわけかガスマスクと網は僕が持つことになった。以上である。

(とにかく、多分大丈夫だよ。夏の大三角くらいは見えるはず)  
ゴークル君の気休めも、今ばかりは頼もしく聞こえる。

(後はビルの光がどうの言っとけば大丈夫だよ)

(そんなんで騙されるかな)

不安である。教師よりはマシとはいえ、規範とやらなければならぬ立場の生徒会役員二人を連れ立って、見えるかどうかもわからない星見。もしくはすんだ汚い空しか見えなかった日には、僕たちが口々に下調べもせず、適当にこの場所を選んだということが発覚してしまうかもしれない。

山を登っていく。登山道も整備されているが、夜の闇の中で登るのは不安だったので、街灯もキチンと整っている車道を使う。脇にはラインが引かれた、一応歩道とも路肩ともつかないスペースがあるので、峠を攻めにきた暴走車両に跳ね飛ばされる可能性は低いだろう……と思う。

ゴッグル君は取り上げられた。今はお姉さんが運んでいる。それすらも、僕とゴッグル君の悪巧みが知れているような疑心暗鬼になってしまうが、冷静になると、恐らく僕が会長さんのよくわからない荷物を持っているので気を回してくれたのだろう、と推察できる。前方を歩く姉弟が、声を立てて笑いあっている様子にも、そういった他意があるようには見えなかった。

「器用なものだな。二人分の笑い声を出すなどと。神の領域だ。そうは思わんか？」

貧乏くじ、と言っては失礼か。必然的に僕と会長が後方を歩くことになった。

「はあ」

「君は生徒会に入るのを断ったそうだな」

「ええ。すいませんが、他を当たっていただけないかと」

「何故だ？」

「ガラじゃないですから」

今もまさに、二人を欺いている格好だ。とてもじゃないが、生徒の為にだとか学園の為にだとか、使命感を持ってやれそうにもない。

「ふむ。だが、内申書は良くなるぞ」

この人こんなんばっかりだな。



「わたしの唯一の懸念と言えば後任人事だったりする」

「それが唯一なんですか」

「わたし亡き後、美咲君がちゃんと一人で出来るもんなのか心配だ」  
死ぬわけではないでしょうに。

「君は意外に胆力もあるようだし、色々を使い勝手が良さそうだ。  
出来れば手伝ってやってくれないか」

使い勝手って…… そんな風に言われて手伝いたいという人間は稀有な気がする。

「そもそも、ちゃんとした手続きというか、選挙みたいなのを経ないで、ポンと入れたりするもんなんですか？」

「欠員が出たんだ。特記事項として、会長が指名する人間を補充できる筈だ」

「例の、峠を攻めに行つてそのまま行方知れずって人ですか。ひよつとして今まさに登つている此処とかだったりして」

「ははは。それは知らないな。まあとにかく、また考えてみてくれ。出来れば君自身が決断してくれるのが良い。わたしも恐喝まがいのようなことはしたくないからな」

「え？」

恐喝まがいのことをするつもりなんだろうか。意味深に笑う会長さん。

イマイチこの人の言うことは冗談なのか本気なのかわからない。

おつか山はそれほど標高の高い山ではなかったが、登頂は諦めた。

あまり帰りが遅くなっても、色々不都合だ。それに、登り始めてすぐに、やぶ蚊の餌食となっていたお姉さんが、中腹辺りで休憩を提案したのが、絶妙のタイミングと場所だった。キャンプなんかにも向くだろう、山を切り開いて、地を均して作った広い土地。公園と言っても良いだろうか、そういう場所に出た頃には、上空の空は既に満点の星たちに彩られていた。

「本当に見えたんだな」

ぼそりと呟いたが、誰も気に留めていない様子だった。それほど圧巻だった。

街で過ごす分にも、一等星やら、ぼやけた星明りは見えたが、空気が清浄な場所で見上げる星空が、これほどまでに違うとは知らなかった。都会っ子にはひたすら新鮮だった。圧倒されそうな、ややもすると押しつぶされそうな存在感。空と地平の境界すら曖昧に感じるほどの威容は、それでいて不快感や恐怖はなかった。

ずるをしようとしていたこと、それがバレるかと気を揉んでいたこと、それらが些事に思える。

来て良かった。掛け値なしにそう思えた。

「まるで天然のズリネタ…… プラネタリウムだね」  
ゴーグル君も嬉しそうだ。

「しかし凄いわね。田舎に里帰りした時に見た空と比べても、そんな色ないように思うわ」

「ここら辺もまだまだ田舎ということなのかもしれない」  
年長組も首を垂直に上げて、ひたすら星空を見ていた。

僕も、もう少しそうしていたかったが、何せ僕のノートには既に観測済みになっている星座の模写、まつわる神話のまとめなんかが列記されている。これをこれだけで完成とする意図はなかったと思わせるものへと変えなければならぬ。

一番それらしいのが、実際の写真を撮って、それを貼り付けるといふものだ。

だがすぐに断念する。カメラなんて持ってきていない。だから、実際に星座を見た感想を、付記することにした。それらしくペンを動かしていく。正直苦肉の策と言わざるを得ないが、何もしないよりはマシと信じたい。

さもしいな、と思う。目の前に広がる大自然のパノラマと対比すると、僕という人間の矮小さが浮き彫りになるかのような錯覚を覚えた。

「見て、アレがさそり座じゃないかしら」

「えー。多分違つよ。あんな御崎君の双眸のようにくすんだ星じゃない筈だよ。多分アレだよ」

何処だ何処だとお姉さん。ゴーグル君がもどかしそうに説明するが、要領を得ないようで、姉弟は言い合いのようになっていた。それも仕方ない。夜空に目印などあるはずもなく、ゴーグル君にも指などはないから。

「それにしても、昔の人は頭がおかしかつたんだろつな。アレをさそりと言ひ張る度胸は買つが」

会長さんの相手もそこそこに、ペンライトと星明りを使って何とか書き上げる。

良し。まあ体裁は繕えたんじゃないだろうか。

「そろそろ、帰りましょう」

「ん？ そうね。あら、もうこんな時間なのね」

言われて、蛍光の腕時計をつられて見ると、八時近くになっていた。少し名残惜しい満天の星たちを残して、僕たちは下山を始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3149y/>

---

一年三組ゴースト君

2011年12月17日08時57分発行